

解題

詩律

一卷

赤澤

一著

赤澤一、字は太乙、一堂と號す、讃岐の人なり、此書は主として詩の格調音韻を論じ、例を引いて之を證せり、其意に以爲へらく、詩は音律を主とす、音律協はざれば詩と爲す可らずと、故に詩對詩病を説くこと頗る精密なり、詩作の部に述ぶる所は、皆痛切にして、作者を戒むるの語多し。天保四年五月京都五車樓初印。

目次

原本に目次を載せず、今之を補ふ。

詩作

詩調

詩韻

五言古風

起句不用押韻 起句押韻 轉韻起句押韻不押韻

七言古

起句轉韻皆押 起句五言者不押韻 對起者不押韻 不對起而不押韻

轉韻不押

三字句四字句六字句 例如五言句法 三字句韻連押

雙句押韻直接上句者等

上下如常押韻中間每句押韻者等

轉韻句 平均者 互均者 插不均者 初短後均者 後短初均者 初長後均者

後長初均者 參差者 不均者

詩對

第一、的名對

第二、隔句對

第三、疊字對

第四、互成對

詩律目次

第五、賦體對

第六、折句對

第七、流水對

第八、意對

第九、錯綜對

第十、借對

第十一、交絡對

第十二、當句對

他四病

詩病

第一、水渾病

第二、水滅病

第三、木枯病

第四、金缺病

第五、土崩病

第六、蜂腰病

第七、鶴膝病

第八、大韻病

第九、小韻病

第十、傍紐病

第十一、正紐病

第十二、平頭病

第十三、闕偶病

第十四、繁說病

第十五、齟齬病

第十六、叢聚病

第十七、忌諱病

第十八、長擷腰病

第十九、長解證病

第二十、支離病

第廿一、相濫病

第廿二、落節病

第廿三、雜亂病

第廿四、文贅病

詩法

詩評

目次畢

序

詩之有律、如國之有律也。古人之作、按律以判之、則首尾結構、字句安插等項、工夫曖昧不明者、悉皆照著、如老吏據獄、點視情狀、不遺也。今人之作、由律以推之、則淫聲奇技、違犯落節、言僞學、非以惑人者、裏底悉見、如廷尉執法、參劾規避、比依以情、徒杖斬絞、各從輕重、科斷也。故作詩者、得律以行之、則所造之巧拙、雖在其人、而不一、而所執之規律、皆符於唐宋古人之紀綱、始可免亂作胡行之弊。如官府所頒甲條乙令、一一臆記、能斷妄念、能誠惡事、便是篤行君子也。佳矣哉。詩之有律、古今律絕、應隨體備具、格令與夫所謂王法律例、金科玉條、何以異乎。一堂赤澤先生、所以立爲森威公論、示行于世、卽是詩道之審錄、作家三尺之法。

天保四年癸巳六月

攝津 晚生 山本 要 謹誌

詩律

詩作

詩雖有諸體不同、皆原於周、所以尊矣、近體之詩、雖有諸家不一、皆出於唐、所以不及矣、周詩三百、各有六義、曰、風雅頌、是其格也、曰、賦比興、是其體也、是故近體之詩、亦具六義、始爲佳、詩者、志也、志之所發、諷以咏之也、是故爲詩者、須真才實學、本性反情、詩出於實情、不可止之地、哭者善哭、喜者善喜、是爲真詩、若其不弔而哭、不病而呻吟、是爲僞詩、卽詩家之通弊、詩作實情、一氣如話、自備格

詩律

讚吉 赤澤 一太 乙 撰
弟 慎太 慎 技

詩作

詩は、諸體同じからざる有り、と雖ども、皆周に原づく、尊き所以なり、近體の詩、諸家一ならず、有りと雖ども、皆唐に出づ、及ばざる所以なり、周詩三百、各六義あり、曰く風雅頌、是れ其の格なり、曰く賦比興、是れ其の體なり、是の故に、近體の詩も、亦六義を具へて始めて佳と爲す、一詩とは志なり、志の發する所、諷じて以て之れを詠するなり、是の故に、詩を爲る者は、須らく真才實學、性に本づき情に反るべし、一詩は、實情止むべからざるの地に出づ、哭する者善く哭し、喜ぶ者善く喜ぶ、是れを眞詩と爲す、其の弔せずして而して哭し、病まらずして而して呻吟する若きは、是れを僞詩と爲す、卽ち詩家の通弊

一

調、是爲妙、徒論格調形似卻忘實情、卽不足爲詩已、詩用故事、要使讀者不知之、徒用故事、大害實情、能作者、陳腐化爲新奇、不能作者、新奇卻劣陳腐、是故詩不喜新奇、不厭陳腐、祇能作者爲上、作詩不思者不可、苦思亦不可、思不思之間、油然而生者、爲妙、卽是古人所謂水中月鏡中花、二條家和歌者流之言曰、臨題起思、應須仰看雲之往來、作詩亦有此理、爲詩者、不若多讀書、多作詩、多作之功、妙運詩材、多少自辨、多固可、少亦可、多讀之功、日富詩材、滿腹皆詩、倘讀書不能運其材、亦何用之爲、是故從多讀書不作詩、無寧多作詩不讀書、近體之詩、必擬於唐、唐有初盛中晚之別、不可不辨、諸雖然有人

なり、詩は實情を作す、一氣話の如く、自ら格調を備ふ、是れを妙と爲す、徒に格調形似を論じ、卻つて實情を忘れば、卽ち詩と爲すに足らざるのみ、詩は故事を用ふ、讀者をして之れを知らざらしむるを要す、徒に故事を用ふれば、大に實情を害す、能く作る者は、陳腐化して新奇と爲る、能く作らざる者は、新奇卻つて陳腐に劣る、是の故に、詩は新奇を喜ばず、陳腐を厭はず、祇だ能く作る者を上と爲す、詩を作りて、思はざるも不可、苦思も亦不可、思不思の間、油然而生するを妙と爲す、卽ち是れ古人の謂はゆる水中の月、鏡中の花なり、二條家の和歌者流の言に曰く、題に臨み思を起す、應に須らく仰ぎて雲の往來を見るべしと、詩を作るにも亦此の理あり、詩を爲る者は、多く書を読み、多く詩を作るに若かず、多作の功は、妙、詩材を運し、多少自ら辨ず、多きも固より可、少きも亦可、多讀の功は、日に詩材に富み、滿腹皆詩、倘し書を読み、其の材を運する能はざれば、亦何を用つて爲さん、是の故に、多く書を読み、詩を作らざるよりは、寧ろ多く詩を作りて、書を讀まざれ、近體の詩は、必ず唐に擬す、唐に初盛中晚の別あり、諸れを辨ぜざるべからず、然りと雖ども、此に人有り、多く詩を作り

于此、多作詩、日求爲唐、雖曰未辨初盛中晚之階級、吾必謂之詩人、學詩者、先讀一人本集、日夜務擬其口氣、是爲易入、選詩者、群玉難選、殆難下手、是故先做一小李白、始構一小杜甫、口氣自由、無所阻礙、能似李白、能欺杜甫、而後廣學他家、益富其腹、後來積功之久、必出脫李杜之窠窟、自成一家、學詩者、猶學宰割之道也、宰割之妙、在于調和、作詩之妙、亦在于調和、均是五鼎八珍、而衆人之所調、未必美也、若使易牙調之、其味太美也、均是金玉錦繡、而白面書生之所作、未必美也、若使李杜裁之、其詩太美也、無他、調和得失已、無美味、無嘉肴、而使易牙執刀向頰、必出新趣向、隨其所、無之物、必美、其味

詩律

て日に唐たらんことを求む、未だ初盛中晚の階級を辨せずと曰ふと雖ども、吾は必ず之れを詩人と謂はん、詩を學ぶ者は、先づ一人の本集を讀み、日夜務めて其の口氣を擬す、是れを入り易しと爲す、選詩は、群玉難選殆ど手を下し難し、是の故に、先づ一の小李白を做し、始めて一の小杜甫を構す、口氣自由、阻礙する所無し、能く李白に似せ、能く杜甫を欺き、而して後に廣く他家を學び、益々其の腹を富まし、後來積功の久しき、必ず李杜の窠窟を出脱して、自ら一家を成さん、詩を學ぶ者は猶宰割の道を學ぶがごとし、宰割の妙は調和に在り、詩を作るの妙も亦調和に在り、均しく是れ五鼎八珍にして、而して衆人の調する所、未だ必ずしも美ならざるなり、若し易牙をして之れを調せしめば、其の味太だ美ならん、均しく是れ金玉錦繡、而して白面書生の作る所は、未だ必ずしも美ならざるなり、若し李杜をして之れを裁せしめば、其の詩太だ美ならん、他無し、調和の得失のみ、美味無く、嘉肴無きも、而かも、易牙をして刀を執りて頰に向はしめば、必ず新趣向を出し、其の無き所の物に隨ひて、必ず其の味を美にせん、風景無く、材料無きも、而かも、李杜をして頰を撫り筆を援らしめば、必ず奇

三

焉、無風景、無材料、而使李杜燃鬚、按筆、必構奇手段、隨其所乏之場、必巧其詩焉、宰割之道、有時乎淡、不可常淡、有時乎濃、不可常濃、作詩之道亦如此、可淡則淡、可濃則濃、濃淡不失其節、卽是詩人之伎倆、猶庖人之伎也、材料全集、要取捨、寧割愛、勿貪多、猶魚鳥葷蔬、均在厨下、非得庖人取捨、不能調和適口、作詩欲勢者、如樊噲拔劍、切肉、一刀直斷、要精密者、如陳平分肉、口之於嘗、味得宜、不支難者、如陳平分肉、口之於嘗、味也、有同嗜焉、詩之於調和也、有同美焉、李杜先知詩之所同美者、易牙先知味之所同嗜者也、解牛之道、必有首尾所宜以宰之也、作詩者、先作轉結、或先聯句、皆失其宜也、

手段を構し、其の乏しき所に隨ひて、必ず其の詩を巧にせん、宰割の道は、時有りてか淡、常に淡なるべからず、時有りてか濃、常に濃なるべからず、詩を作るの道も亦此の如し、淡なるべければ則ち淡、濃なるべければ則ち濃、濃淡其の節を失はず、卽ち是れ詩人の伎倆、猶庖人の伎のごときなり、材料全集、取捨を要す、寧ろ割愛す、も多きを食ふこと勿れ、猶魚鳥葷蔬均しく厨下に在り、庖人の取捨を得ざれば、調和口に適する能はざるがごとし、作詩勢を欲するは、樊噲の劍を抜きて肉を切り、一刀直斷するが如く、精密を要するは、陳平の牛を解き、節々乖かざるが如く、布置宜しきを得て支離せざるを要するは、陳平の肉を分つが如くなるべし、一口の味を嘗むるに於けるや、同く嗜むあり、詩の調和に於けるや、同く美とするあり、李杜は先づ詩の同く美とする所を知る者、易牙は先づ味の同く嗜む所を知る者、牛を解くの道は必ず首尾宜しき所有りて以て之を宰するなり、詩を作るには、先づ轉結を作り、或は聯句を先にするは、皆其宜しきを失ふなり、人の言ひ難しとする者は、我必ず言ふを易しとす、人の言ふを易しとする者は、我卻つて言ふを難しとす、直なる者は曲言し、曲なる者は

人難言者、我必易言、人易言者、我卻難言、直者曲言、曲者直言、卽是英雄欺人之伎、有起句直入題者、有間架一二句、次入題者、有二三句、四五句、最後入題者、要之勿離題、勿拘題、離者意散、拘者情窮、今日之天地、自有鶯花、昔日之天地、亦有鶯花、陳新代謝、交做風景、是乃自然之理、豈有古今一樣不變之春乎、詩亦如此、周詩三百、爲詩之祖、而不變、虞之賡歌、夏之五子、矣、況周以二南爲風始、而風之詩、不必同于南雅之音、不必同于頌也、唐宋卓然、各能樹立、以成一代之風雅、若竝爲唐音、亦祇爲唐之附庸、而何以成其元音也、古人之詩體、裁格調、各自不一、樣、高古、深遠、雄渾、飄逸、悲壯、凄婉、讀者自得、

詩律

は直言す、卽ち是れ英雄人を欺くの伎なり、起句直に題に入る者あり、二三句を間架し、次に題に入る者あり、二三句四五句、最後に題に入る者あり、之れを要するに、題を離るゝこと勿れ、題に拘ること勿れ、離るれば意散じ、拘はれば情窮まる、今日の天地、自ら鶯花あり、昔日の天地にも、亦鶯花あり、陳新代謝交、風景を做す、是れ乃ち自然の理、豈に古今一樣變ぜざるの春あらんや、詩も亦此くの如し、周詩三百詩の祖たり、而して必ずしも虞の賡歌、夏の五子を襲せず、況んや周は二南を以て風の始と爲す、而して風の詩は、必ずしも南に同じからず、雅の音は、必ずしも頌に同じからず、唐宋卓然として、各能く樹立し、以て一代の風雅を成す、若し竝に唐音を爲さば、亦祇に唐の附庸と爲る、而して何を以て其の元音を成さむや、古人の詩體、裁格調、各自一様ならず、高古、深遠、雄渾、飄逸、悲壯、凄婉、讀者自ら其の意を得ん、詩を信ぜざる者は、之れを言ふとも知らず、詩を信ずる者は、言はざるも亦知る、言はずして而して知る者は、其の妙處を自得して誤ること勿し、然りと雖ども、詩人たび其の入手の處を失へば、必ず多少の魔嬾有らん、難いかな詩や、

其意、不信詩者、言之不知、信詩者不言亦知、不言而知者、自得其妙處、勿誤、雖然詩人一失其入手處、必有多少糜爛、難矣哉詩。

詩調

詩主音韻、音韻不協、終不可爲詩也、僅是言之五七者、漢人言語、平日用韻、辨其輕重、是故其詩固有巧拙不同、尙能調和、可以諷咏焉、爲詩者、必擬其人、必學其代、何物爲漢魏、何物爲六朝唐宋、何物爲李杜沈宋、何物爲元白、一一明了、詳辨其調、始爲造妙境、享保以下爲詩者、必主唐明、享和以來爲詩者皆嫻宋元、雖然其人不知音韻之道理、果能辨開元天寶乎、果能別東坡山谷乎、吾未信其實否、不知音韻、漫擬其辭者、乍散

詩調

詩は音韻を主とす、音韻協はざれば、終に詩と爲すべからざるなり、僅に是れ言の五七なる者なり、漢人の言語は、平日韻を用ひて、其の輕重を辨ず、是の故に其の詩固より巧拙同じからざる有るも、尙能く調和す、以て諷詠すべし、詩を爲る者は、必ず其の人に擬し、必ず其の代を學ぶ、何物を漢魏と爲し、何物を六朝唐宋と爲し、何物を李杜沈宋と爲し、何物を元白と爲すと、一一明了、詳に其の調を辨じて、始めて妙境に造ると爲す、享保以下、詩を爲る者は、必ず唐明を主とす、享和以來、詩を爲る者は、皆宋元に嫻ふ、然りと雖ども、其の人、音韻の道理を知らず、果して能く開元天寶を辨ぜんか、果して能く東坡山谷を別たんか、吾未だ其の實否を信ぜず、音韻を知らずして、漫に其の辭を擬する者は、乍ら散乍ら曠、乍ら急喉嚨の間、開合常無し、固より之れを諷詠す

乍縮乍寬乍急、喉嚨之間、開合無常、固不可

諷咏之矣、崎港漢人讀本邦所稱名家大

家之詩、皆必廢不取焉、無他、其人不知音韻

故也、試使野人造俗謠、其義可通、而不可上

之三絃、無他、野人不知調律也、本邦人士不

知音韻、妄作詩、亦猶此段、凡造俗謠者、先

屬其語、次施其音節、必仍便宜改語、次調諸

三絃、亦必便宜改語、如此三調其曲、始成一

齣俗謠、由此觀之、本邦人士造本邦之曲、尙

且難、況於詩賦之上、蜂腰鶴膝、雙聲疊韻、

休文三尺法、古今作者犯者不少也、雖然、漢

人自有調音之法、可免其帶齒粘喉之病也、

本邦之人不可如此、凡詩、四聲參差、平側

互交、不可重複、相仍是爲妙用、其例有三忌、

べからず、崎港の漢人、本邦稱する所の名家大家の詩を

讀めば、皆必ず廢して取らず、他無し、其の人、音韻を知ら

ざるが故なり、試に野人をして俗謠を造らしめば、其の

義は通すべきも、而かも之れを三絃に上すべからず、他

無し、野人は調律を知らざればなり、本邦人士、音韻を知ら

らずして、妄に詩を作るは、亦猶此の段のごとし、凡そ

俗謠を造る者は、先づ其の語を屬し、次に其の音節を施

し、必ず便宜に仍りて語を改め、次に諸れを三絃に調す

るにも、亦必ず便宜に語を改む、此の如く三たび其の曲

を調して、始めて一齣の俗謠を成す、此れに由りて之れ

を觀れば、本邦人士にして本邦の曲を造るも、尙且ほ難

し、況んや、詩賦の上に於てをや、蜂腰鶴膝、雙聲疊韻、休

文三尺法、古今の作者、犯す者少からず、然りと雖ども、漢

人には、自ら調音の法あり、其の帶齒粘喉の病を免るべし、本邦の人、此くの如くなるべからず、凡そ詩は、四聲參差、平側互交し、重複相仍るべからず、是れを妙用と爲す、其の例、三忌あり、首は韻雜を忌み、次は音連を忌み、三は字連を忌む、三要あり、頭は變換を要し、腰は響を要し、勢は相承を要す、換法には、變換あり、單換あり、雙換を可と爲す、腰とは、五言の三字、七言の五字、是れなり、上に上聲

首忌韻雜、次忌音連、三、忌字遊、有三、要頭要、
 雙換、腰要響、勢要相承、換法、有雙換、有單換、
 雙換爲可、腰者、五言三字、七言五字、是也、上
 有上聲相連、下必平聲相連、以均其勢也、上
 聲與平聲相近、以間數側數平、去入啞音相
 連、是期期艾艾之文、可忌、大氏漢人學士之
 詩、利于案上、而不利于場上、本邦學士之詩、
 利于眼中、而不利于舌頭、此是本邦學士作
 詩之法、亦不可已之方便門、

詩韻

五言古風起句不用押韻爲常例、如杜甫潼
 關吏、起句押韻、此法尤希矣、轉韻起句押韻、
 不押韻俱可、古人作例、大抵相半、如李白古
 風月微韻、寒上曲蕭職韻、以詩代、并答元丹

相連なること有れば、下必ず平聲相連りて以て其の勢を
 均しくするなり、上聲と平聲と相近し、以て數側數平を
 間す、去入啞音相連なるは、是れ期々々々の文にして、忌
 むべし、大抵漢人學士の詩は、案上に利にして、而して場
 上に利ならず、本邦學士の詩は、眼中に利にして、而して
 舌頭に利ならず、此は是れ本邦學士詩を作るの法、亦已
 むべからざるの方便門なり。

詩韻

五言古風起句は押韻を用ひざるを常例と爲す、杜甫の
 潼關吏の如き、起句韻を押す、此の法尤も希なり、轉韻の
 起句は韻を押すも、韻を押さざるも、俱に可なり、古人
 の作例、大抵相半す、李白の古風月は微韻、寒上曲は蕭
 職韻、詩を以て書に代へて元丹丘に答ふ、廬山の瀑布を
 望む月を望みて想ふあり、杜甫の石壕吏、王維の藍田石

丘、望、廬山瀑布、望、月有想、杜甫石壕吏、王維
 藍田石門精舍、韋應物擬行行重行行、擬、庭
 前有奇樹皆押韻也。

七言古、起句轉韻皆押、起句五言者、不用押、
 對起者亦同、是爲常例、如張謂湖中對月行、
 李頎古從軍行、卽是七言對起、不押韻者、如
 李頎聆董太彈胡箏聲、杜甫舞劍器行、曹將
 軍畫馬圖引岑參崔五丈屏風烏孫佩刀、卽
 是七言不對起、而不押韻者、此法希矣、如李
 白遊天姥吟、韋應物江草歌、張籍節婦吟、白
 頭吟、卽是五言起二句、不得、不押韻也、轉韻
 准之、如杜甫舞劍器行、韓翃贈王侍御赴上
 都、卽是轉韻不押、此法爲希。

三字句、四字句、六字句、例如五言句法、三字

詩律

門精舍、韋應物の、行々重ねて行々に擬する、庭前に奇樹
 あるに擬するが如きは、皆韻を押すなり。

七言古は、起句轉韻皆押す、起句五言は、押すを用ひず、對
 起も亦同じ、是れを常例と爲す、張謂の湖中に月に對す
 る行、李頎の古從軍行の如きは、卽ち是れ七言對起韻を
 押さざる者なり、李頎の董太が胡箏を彈する聲を聆く、
 杜甫の劍器を舞はす行、曹將軍畫馬圖引岑參の崔五丈
 の屏風烏孫の佩刀の如きは、卽ち是れ七言の對起せず
 して而して韻を押さざる者なり、此の法希なり、李白の
 遊天姥吟、韋應物の江草歌、張籍の節婦吟、白頭吟の如き
 は、卽ち是れ五言起二句にして韻を押さざるを得ざる
 なり、轉韻も之れに准ず、杜甫の劍器を舞はす行、韓翃の
 王侍御が上都に赴くに贈るが如きは、卽ち是れ轉韻に
 して押さず、此の法希なりと爲す。

三字句、四字句、六字句は、例、五言の句法の如し、三字句の

句、韻連押者、如駱賓王帝京篇、已矣哉歸去來、卽是、又如李白遠別離起句、三字爲贅、如張籍各東西起句、遊人別、高適還山吟起句、不贅且押韻、其法正相反矣。

雙句押韻、直接上句者、如杜甫短歌行、且脫劍佩休徘徊、眼中之人吾老矣二句、每句連押者、無嫌雙句、如高適還山吟、吟深心連押、及子美飲中八仙歌、又三句者、上下二句押韻、中間一句不押韻、如郎士元塞下曲、起三句、兒知押韻、卽是雙殺單殺之別。

上下如常押韻、中間每句押韻者、如孟浩然夜歸鹿門歌、起四句、元韻四、王維送友人歸山歌、上九句每句韻、下四句隔句韻、岑參青門歌、齊韻四連押、李白遠別離、紙韻三連押、

韻連押の者は、駱賓王の帝京篇、已矣哉歸去來の如きは、卽ち是れなり、又、李白の遠別離の起句の如きは、三字贅たり、張籍の各東西の起句、遊人別、高適の還山吟の起句の如きは、贅せずして且つ韻を押せり、其の法正に相反せり。

雙句にして韻を押し、直に上句に接する者は、杜甫の短歌行の「且く劍佩を脱して徘徊するを休めよ、眼中之人吾老いたり」の二句の如し、每句連押する者は、雙句を嫌ふ無し、高適の還山吟、吟深心連押す、及び、子美の飲中八仙歌の如し、又、三句の者にて、上下二句は韻を押し、中間一句は韻を押さず、郎士元の塞下曲、起三句、兒知韻を押すが如し、卽ち是れ雙殺單殺の別なり。

上下常の如く韻を押し、中間每句韻を押す者は、孟浩然の夜、鹿門に歸る歌の如き、起四句、元韻四、王維の友人が山に歸るを送る歌、上九句は每句韻、下四句は隔句韻、岑參の青門歌、齊韻四連押、李白の遠別離、紙韻三連押、新鶯百啭歌、庚青十一韻、六句連押、廬山謠は陽八韻、七

新鶯百囀歌、庚青十一韻、六句連押、廬山謠、陽八韻、七句連押、遊天姥吟、末刪韻四三連、杜甫哀王孫、虞韻十七、中間二處、二句連押、短歌行、灰四、末二連、紙四、末二連、韓翃別王侍御赴上都、魚虞四轉韻不押、中間二連、王建當窻織、職韻四連、高適還山吟、侵三連、紙四、初三連、次先四、隔句韻、他例知之、略于此。轉韻句數、分段平均者爲佳、雖然作者應時隨宜、變化不一、樣、只要不太長、不太短、無失前後斤兩、其例有九。

平均者、句數斤兩相均之謂也、李白妾薄命、屋二、魚二、以詩代書答元丹丘、語二、先三、沃三、刪三、起句、網、押、送韓準裴政孔巢父還山、疑二、眞二、陌二、眞二、杜甫石壕吏、眞元寒三、變遇三、紙三、王維送

詩律

句連押、遊天姥吟は末刪韻四三連、杜甫の哀王孫は、虞韻十七、中間二處、二句連押、短歌行は、灰四末二連、紙四末二連、韓翃の王侍御が上都に赴くに別る、魚虞四、轉韻押せず、中間二連、王建の窻に當りて織るは、職韻四連、高適の還山吟は、侵三連、紙四、初三連、次先四、隔句韻、他例之れを知れ、此に略す。

轉韻句數、分段平均の者を佳と爲す、然りと雖ども、作者時に應じ宜しきに隨ひ、變化一樣ならず、只だ太だ長からず、太だ短からず、前後斤兩を失ふこと無きを要す、其の例九有り。

平均の者、句數斤兩相均しきの謂ひなり、李白の妾薄命、屋二、魚二、詩を以て書に代へ、元丹丘に答ふ、語二、先三、沃三、刪三、起句、網、押、韓準裴政孔巢父の山に還るを送る、疑二、眞二、陌二、眞二、杜甫の石壕吏、眞元寒三、變遇三、紙三、王維の魏郡李太守の任に赴くを送る、支二、其陰二、殺祖三、詠に贈る、魚二、

魏郡李太守赴任^{支二}、^計隊^二、^徵贈^三、^詠頌^三、^魚皓^二、^支副^二、^王昌齡長歌行^{歌四}、^皓四、^岑參送^王六赴江寧^{文二}、^統二、^尤二、^韋應物擬庭前有奇樹^{陽二}、○以上五言、孟浩然夜歸鹿門歌^{元四}、^每句、^張謂湖中對月行^{麻二}、^陪三、^崔顥七御遇^三、^張謂湖中對月行^{麻三}、^起四、^崔顥七夕詞^{尤三}、^代閨人答輕薄少年^{支三}、^陪三、^寒三、^王維夷門行^{支三}、^馬三、^同崔傳答賢弟^{陪三}、^御三、^真、^老將行^{支六}、^文六、^尤、^李頎古意^{陪三}、^微三、^古行軍行^{歌二}、^樂三、^送陳韋甫^{職三}、^贊三、^寒三、^高適古梁行^{真三}、^紙三、^元、^送田少府貶蒼梧^{支二}、^疎三、^五、^贈別晉三處士^{元三}、^皓三、^封丘縣^{馬三}、^支三、^岑參登古鄴城^{起四}、^五、^函谷關歌^{陪二}、^紙三、^魚三、^青門歌^{灰二}、^解二、^東三、^寒三、^齊四、^每句、^送費子歸武昌^{陪三}、^先三、^寒三、^陪三、^衛節度赤驃馬歌^{職三}、^支三、^有三、

副^二、^皓二、^王昌齡の長歌行^{歌四}、^岑參の王六が江寧に赴くを送る^{文二}、^紙二、^尤二、^韋應物の庭前奇樹有るに擬す^{陽二}、○以上五言、孟浩然の夜鹿門に歸るの歌^{元四}、^每句、^張謂の湖中月に對する行^{麻二}、^陪三、^崔顥の七夕詞^{尤三}、^閨人に代りて輕薄少年に答ふ^{支三}、^陪三、^寒三、^王維の夷門行文^{支三}、^馬三、^同じく賢弟に答ふ^{陪三}、^寒三、^老將行^{支六}、^文六、^尤、^李頎の古意^{陪三}、^微三、^古行軍行^{歌二}、^樂三、^陳韋甫を送る^{職二}、^贊三、^寒三、^高適の古梁行^{真三}、^紙三、^元、^田少府が蒼梧に貶せらるゝを送る^{先二}、^疎三、^支三、^晉三、^三處士に贈別す^{元三}、^皓三、^封丘縣^{馬三}、^支三、^岑參の古鄴城に登る^{起四}、^五、^函谷關の歌^{陪二}、^紙三、^青門の歌^{灰二}、^解二、^東三、^寒三、^齊四、^每句、^送費子が武昌に歸るを送る^{皓三}、^先三、^陪三、^寒三、^赤驃馬歌^{職三}、^有三、^陪三、^寒三、^獨孤漸道と別る^{早三}、^寒三、^三處士^{元三}、^皓三、^李白の瀾陵行^{陪三}、^寒三、^杜甫の短歌行^{灰四}、^劉長卿の客舍にて鄭三の過ぎらるゝを喜ぶ^{陪三}、^魚三、^錢起の鄜鄜が郷に還るを送る^{皓三}、^寒三、^韋應物の月洲の歌^{尤三}、^遇三、^支四、^戎昱の客舍秋夕^{尤三}、^李涉の瀨陽行^每句、^陪三、

陽三、與獨孤漸道別、早三、庚三、珍吻三、微三、樂紙三、
 李白瀟陵行、起、開、五、青、三、杜甫短歌行、紙四、
 劉長卿客舍喜鄭三見過、微三、屋三、錢起送鄖
 郎還鄉、微三、錫三、韋應物月洲歌、尤三、遇三、支四、戎
 昱客舍秋夕、尤三、李涉滙陽行、馬三、紙三、張文三、
 籍送遠曲、沃三、寄衣曲、紙三、王建望夫石、尤二、
 老婦嘆鏡、除、奉、三、王勃滕王閣、尤三、宋之
 問至端州驛題壁、微三、孫逖山陰城西樓、翻三、
 高適人日寄杜二拾遺、陽三、御三、岑參花樹
 歌、皓三、張若虛春江花月夜、庚三、經三、真三、紙三、
 衛萬吳宮怨、紙三、
 互均者、上下互均斤兩之謂也、李白望廬
 山瀑布、紙四、東三、高適哭單父梁九少府治、
 魚二、紙四、真青三、吻、三、四、三、三、同是六、○以上五言、崔顥孟門

詩律

馬三、紙三、張籍の遠を送る曲、沃三、衣を寄する曲、真三、
 文三、沃三、
 王建的望夫石、尤二、老婦鏡を嘆ず、除、奉、三、王勃の滕王
 閣、尤三、宋之問の端州驛に至りて壁に題す、經三、孫逖
 の山陰城西樓、皓三、高適の人日、杜二拾遺に寄す、陽三、御三、
 岑參の花樹歌、皓三、張若虛の春江花月夜、庚三、經三、真三、
 文三、紙三、
 衛萬の吳宮怨、紙三、
 三、遇三、

互均の者、上下互に斤兩を均しくするの謂ひなり、李
 白の廬山瀑布を望む、紙四、東三、高適の單父梁九少府、
 治を哭す、魚二、紙四、真青三、吻、○以上五言、崔顥の孟門
 行、皓三、二、四、三、三、同是六、○以上五言、崔顥の孟門
 行、皓三、支三、李頎の古行路難、經三、陽四、右三、真三、真三、
 四三三同是六、中間二を括み

行、陌二、眞三、支三、李頎古行路難、疑二、陽四、宥二、紙三、
同是六、中間、緩歌行、尤三、紙三、陽三、馬二、微四、二
插二、塵上、岑參胡笳行、支三、皓二、文三、錢起送張將軍西征、疑二、微三、阮三、

插不均者、上下斤兩平均、中間特插不均之謂也、張謂贈喬林、尤三、陽二、崔顥長安道、文三、解二、岑參白雪歌、附二、灰二、遇三、蒸二、送支三、插二、魏升卿歸東都、東二、五言、紙三、微三、宥二、魚三、李白單父東樓送族弟、疑二、五言、尤三、屑三、眞錢起微古、陽三、紙二、王建行見月、庚二、月二、歌三、沃屋二、支微二、劉庭芝公子行、疑三、麻四、陽五、

初短後均者、後段斤兩平均、初段僅短之謂也、李白塞上曲、蕭二、職三、以上五言、張謂代北州老翁答、尤二、紙二、庚三、張籍各東西、齊三、

て上に緩歌行、尤三、紙三、陽三、馬二、微四、二岑參の胡笳行、支三、皓二、文三、錢起の張將軍の西征を送る、疑二、微三、

挿不均の者、上下斤兩平均中間特に不均を挿むの謂ひなり、張謂の喬林に贈る、尤三、陽二、崔顥の長安道、文三、解二、支三、岑參の白雪歌、附二、灰二、遇三、蒸二、魏升卿が東都に歸るを送る、東二、五言、紙三、微三、宥二、魚二、李白の單父東樓に族弟を送る、疑二、五言、尤三、屑三、眞錢起の古に微古、陽三、紙二、王建の行、月を見る、庚二、月二、歌三、沃屋二、支微二、劉庭芝の公子行、疑三、麻四、陽五、を挿む、

初短後均の者、後段斤兩平均、初段僅短の謂ひなり、李白の塞上曲、蕭二、職三、以上五言、張謂の北州老翁に代りて答ふ、尤二、紙二、庚三、張籍の各東西、齊三、杜甫の曹將軍

語三、杜甫曹將軍畫馬圖引、四、陽二、陌三、殺三、東
紙三、丹青引、元三、真文三、殺五、高適還山吟、後三、東五、深五、真五、每句、

後短初均者、初段斤兩平均、後段僅短之謂也、杜甫七歌、紙四、漢陂行、支三、賦三、灰三、
賦三、張籍白頭吟、後二、五言、御過三、節婦吟、支三、
歌二、王建、田家留客、屋三、虞三、杜甫、馬三、支二、
行、東三、旨三、府三、支二、

初長後均者、李頎放歌行答從弟墨卿、藥五、虞三、陌三、支三、
藥三、張籍征婦怨、後三、虞二、
王建短歌行、實三、支二、

後長初均者、岑參喜韓尊相過、暗二、支二、
梁州館中夜集、尤二、麻二、輪二、
劉長卿送姚子弟、真二、有二、
蕭三、深三、崔五丈屏風、烏孫佩刀、後三、
丁

詩律

畫馬圖引、陽二、陌三、殺三、東四、府三、阮三、
丹青引、元三、真文三、殺五、高適還山吟、後三、東五、深五、真五、每句、
適の還山吟、後三、每句、紙四、先四、

後短初均の者、初段斤兩平均、後段僅短の謂ひなり、杜甫の七歌、紙四、漢陂行、支三、賦三、灰三、
賦三、張籍の白頭吟、後二、五言、御過三、節婦吟、支三、
歌二、王建の田家客を留む、屋三、虞三、杜甫の、馬三、支二、

初長後均の者、李頎の放歌行從弟墨卿に答ふ、藥五、虞三、
藥三、張籍の征婦怨、後三、虞二、
王建の短歌行、實三、支二、

後長初均の者、岑參の韓尊の相過ぐを喜ぶ、暗二、支二、
梁州館中夜集、尤二、麻二、輪二、
劉長卿の姚子弟を送る、真二、有二、
蕭三、深三、崔五丈屏風、烏孫佩刀、後三、
丁仙芝の餘杭醉歌、真二、

一五

仙芝餘杭醉歌漢二、五言、
御二、仄四、

參差者、段法參差、然亦不、太長、不、太短之謂

也、李白酬崔五郎中、職二、東陽二、奇二、
支六、賄三、副三、經

下邳圮橋懷張子房、麻二、董、
東三、望月有懷、漢三、
後三、

韋應物擬行行重行行、寒、
副四、以上五言、

張說鄴都引、屋四、
真三、王維送友人歸山歌、支、
微

五、文元五、上、隨頭吟、尤四、
高適邯鄲少年行、
紙

九、句、連押韻、燕歌行、
紙三、副三、
漢三、別韋參軍、五言、
陽二、

二、尤三、李自烏栖曲、
支二、
賈、梁園吟、職二、
尤三、

真六、遊天姥吟、
尤二、
龔二、
庚三、
月二、
齊

三、遊天姥吟、
尤二、
龔二、
庚三、
月二、
齊

麻四、杜甫舞劍器行、
陌七、
兵庫行、
蕭四、
真二、

二、送友人東歸、
後二、
劉長卿齊一

影堂、文三、
先三、
麻、
鈴笛歌、
錫三、
尤三、
嘯、
錢起

青城山歌、冬二、
陌、
韋應物鈴鶯曲、
庚青四、
蕭二、
沃

五言、
御二、
仄四、

參差の者 段法參差然れども、亦太だ長からず、太だ短

からざるの謂ひなり、李白の崔五郎中に酬の職二、東陽
二、奇二、

支六、賄三、副三、下邳の圮橋を経て張子房を懷ふ、
麻二、董、
東三、望月有懷、漢三、
後三、

望みて懷ふ有り、後三、
韋應物の行々重ねて行々に擬す
寒、
副四、以上五言、張說の鄴都の引、屋四、
真三、王維の友

人が山に歸るを送る歌、支、
微五、
文元五、
上九句、
連押韻、
隨頭吟、
尤四、
高適

の邯鄲少年行、紙三、
文三、
燕歌行、
職三、
副三、
漢三、
章參軍に

別る、陽二、
五、
真六、
李自の烏栖曲、
支二、
賈、
梁園吟、
職二、
尤三、

三、遊天姥吟、
尤二、
龔二、
庚三、
月二、
齊、
馬二、
紙四、
紙二、
副三、
杜

甫の舞劍器行、陌七、
兵庫行、
蕭四、
真二、
紙二、
尤二、
齊友

人の東歸を送る、後二、
劉長卿の齊一、
影堂、
文三、
先三、
職三、
笛を

聆くの歌、錫三、
尤三、
嘯、
錢起の青城山の歌、
冬二、
陌、
韋應物

の鶯を聆く曲、庚青四、
蕭二、
沃、
蕭二、
元、
江草歌、
皓二、
庚二、
銑三、
眞三、
過二、
支三、
郎士元の塞下の曲、
支二、
韓偓の王侍御が上都に赴くに別

る、陌二、
眞三、
後二、
紙二、
魚、
廣四、
顯況の日晚歌、
府二、
王建の遠に寄する

曲、語三、
羽林行、
紙二、
東三、
徑窻に當りて織る、
職四、
翰三、
田

二、調二、江草歌、皓二、庚二、支三、郎士元塞下曲、
 支三、韓翃別王侍御赴上都、紙二、魚三、微二、
 月三、顧況日晚歌、調三、王建寄遠曲、支三、羽林行
紙二、東三、徑當窻織、職四、輪三、田家行、月二、庚
微二、侵二、溫泉宮行、二、尤三、劉廷芝代悲白頭
 翁、麻二、沃二、李太白烏夜啼、齊二、盧照鄰
 長安古意、文三、紙三、李太白蜀道難、先四、
 駱賓王帝京篇、元二、屋五、微七、文五、支三、
麻四、微二、不均者、二、未二、李白古風、月二、王維藍田
 石門精舍、東四、以上五言、岑參邯鄲客
 舍歌、皓二、李白遠別離、調三、蜀道難、先
七、百疇歌、皓二、扶風豪士歌、麻
二、廬山謠、元三、杜甫送孔巢父兼

詩律

家行、月二、溫泉宮行、灰三、劉廷芝の白頭を
 悲む翁に代る、麻二、李白の烏夜啼、齊二、盧照
 隣の長安古意、東四、李白的烏夜啼、皓三、駱賓
 王の帝京篇、元二、廬山の謠、元三、杜甫の孔
 巢父を送り兼て李白に早す、遇七、

不均の者、李白の古風、月二、王維の藍田石門精
 舍、東四、以上五言、岑參の邯鄲客舍歌、皓二、李白の遠
 別離、調三、蜀道難、先四、百疇歌、皓二、廬山の謠、元三、杜甫の孔
 巢父を送り兼て李白に早す、遇七、

呈李白過七、魚四、

以上九例、隨宜應時、以構工夫、俱存作者之伎倆、不須太拘拘焉、全篇一韻者、分段句數、俱要不失斤兩、亦准此例、

詩對

凡對有十二種、如左、所載。

第一的名對、一名正名對、又名正對、或切對、如西園東圃相

對、平野高山相對、千金雙玉相對等、

第二隔句對、一曰扇對、以第一句對第三句、第二

句對第四句、如昔年共照松溪影、松折碑荒

僧已無、今日還思錦城事、雪消花謝夢何如、

鄭都

第三疊字對、如夏暑夏不衰、秋陰秋未歸、琴

命清琴、酒進佳酒、又學懶真成懶、知休卻得

以上九例、宜しきに隨ひ時に應じ、以て工夫を構ふ、俱に作者の伎倆に存す、須らく太だ拘々たるべからず、全篇一韻の者、分段句數俱に斤兩を失はざらんを要す、亦此の例に准す

詩對

凡そ對に十二種あり、左に載する所の如し、

第一的名對、一名正名對、又名正對、或は切對、西園と東圃と相對し、平野と高山と相對し、千金と雙玉と相對する等の如し、

第二隔句對、一に扇對と曰ふ、第一句を以て第三句に對し、第二句は第四句に對す、昔年共に照す松溪の影、松は折れ碑は荒れて僧已に無し、今日還て思ふ錦城の事、雪は消え花は謝して夢何如の如し、鄭都

第三疊字對、夏暑夏衰へず、秋陰秋未だ歸らず、琴は清琴に命じ、酒は佳酒を進む、又、懶を學んで真に懶と成

命清琴、酒進佳酒、又、懶を學んで真に懶と成

休楊萬名曰雙擬對、看山山已峻、望水水仍清、又絕壁入天天入水、亂篙鳴石石鳴船楊萬名曰聯綿對、俱疊字對格也。

第四互成對、如天地對日月、麟鳳對金銀、若天地相對、日月相對、卽爲的名對、又如天山相對、花鳥相對、名曰異類對、亦互成對之類也。
第五賦體對、如皎皎朦朦相對、名曰重字對、徘徊悵悵相對、名曰疊韻對、崎嶇嶢嶢相對、名曰無聲對、俱皆賦體對也、句頭句腹句尾各擇用。

第六折句對、如鳳皇樂奏鈞天曲、烏鵲橋通織女河、靜愛竹時來野寺、獨尋春偶過溪橋、第七流水對、如春日鶯鳴脩竹裏、仙家犬吠白雲間。

詩律

り、休を知つて卻つて休を得たり楊萬名づけて雙擬對とも曰ふ、山を見て山已に峻、水を望んで水仍ほ清し、又絶壁天に入つて天水に入る、亂篙石に鳴つて石船に鳴る、楊萬名づけて聯綿對と曰ふが如き、俱に疊字對の格なり。

第四互成對 天地の日月に對し、麟鳳の金銀に對するが如し、天地相對し、日月相對するが如きは、卽ち的名對と爲す、又、天山相對し、花鳥相對するが如きは、名づけて異類對と曰ふ、亦互成對の類なり。

第五賦體對 皎皎と朦朦と相對するが如きは、名づけて重字對と曰ふ、徘徊と悵悵と相對するを名づけて疊韻對と曰ふ、崎嶇と嶢嶢と相對するを名づけて雙聲對と曰ふ、俱に皆賦體對なり、句頭、句腹、句尾、各、擇用す。

第六折句對 「鳳皇樂は鈞天曲を奏し、烏鵲橋は織女河に通ず、靜に竹を愛して時に野寺に來り、獨り春を尋ねて偶、溪橋を過ぐ」の如し。

第七流水對 「春日鶯は鳴く脩竹の裏、仙家犬は吠く白雲の間」の如し。

第八意對、如「歲暮涼風相對、寢興白露爲對、事意相因、文理無爽、故爲對。」

第九錯綜對、如「紅稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老

鳳皇枝」社老

第十借對、如「曉路秋霜、路露同、初蟬密蔦、蔦鳥同名爲假音對、馬頰河熊耳山爲對、漆沮四塞、漆四數名、曾參陳軫、軫參星名爲對、是不平常、故名爲奇對、馮翊龍首爲對、泉流赤峰、泉字有白、與赤對、英彥桂酒爲對、義別字形半對、名爲側對、一曰字側對、厨人具鷄黍、稗子摘楊梅孟浩、水春雲母碓、風掃石楠花、李竹葉於人既無分、菊花從此不須開陸少、名爲假對、共皆借對之類也。

第十一交絡對、如「裙拖六幅瀟湘水、鬢聳巫

第八意對 歲暮と涼風と相對し、寢興と白露と對を爲すが如し、事意相因、文理爽ふ無し、故に對を爲す。

第九錯綜對 「紅稻啄み餘す鸚鵡の粒、碧梧棲み老ふ鳳皇の枝」の如し社老

第十借對 曉路と秋霜と、路は露に同じ、初蟬と密蔦と、蔦は鳥に同じきが如し、名づけて假音對と爲す、馬頰河と熊耳山と對を爲し、漆沮と四塞と、漆四は數名、曾參と陳軫と、軫參は星の名にして對を爲す、是れ平常ならず、故に名づけて奇對と爲す、馮翊と龍首と對を爲し、泉流と赤峰と、泉の字に白有りて赤と對す、英彥と桂酒と對を爲し、義は別なれども、字形半ば對す、名づけて側對と爲す、一に字側對、厨人鷄黍を具へ、稗子楊梅を摘む孟浩、水は春く雲母碓、風は掃ふ石楠花李竹、竹葉人に於て既に分無く、菊花此れ從り開くを須ひず陸少、名づけて假對と爲す、共に皆借對の類なり。

第十一交絡對 「裙は拖く六幅瀟湘の水、鬢は聳ゆる巫山

山一段雲李群玉野老就耕去荷鋤隨牧童孟浩
然欲作一晴多少日早知祗費數朝寒楊萬里

第十二當句對句對一曰就如小院廻廊春寂寂

浴鳧飛鷺晚悠悠少陵孤雲獨鳥川光暮萬里

千山海氣秋李嘉前輩於文亦有此體如龍

光射斗牛之墟徐孺下陳蕃之榻王勃

右十二種對古人所常用也如他鄰近體偏

對一曰聲類雙虛實對疊韻側對雙聲側對切側

對背體對合境對字對向對平對同文對等

皆略之對有四病如前句雙聲後句直語或

空談名曰跛對前句有形後句無色前句物

色後句人名名曰眇對言換而意不換名曰

合掌對花柳相對龍鳳爲對名曰板腐對共

皆可忌雙聲即雙聲對疊韻即疊韻對爲佳

詩律

一段の雲李群玉野老耕に就いて去り、鋤を荷ふて牧童に
隨ふ孟浩一晴を作さんと欲す多少の日、早く知る程に
數朝の寒を費すを楊萬里の如し。

第十二當句對一に就句對と曰ふ「小院廻廊春寂々、浴鳧飛鷺晚に

悠悠少陵孤雲獨鳥川光の暮、萬里千山海氣の秋李嘉の如

し、前輩の文に於けるも、亦此の體あり、龍光是斗牛の墟
を射、徐孺は陳蕃の榻を下す王勃の如し。

右十二種對、古人の常用する所なり、他、鄰近對、偏對一に聲類

對と雙虛實對、疊韻側對、雙聲側對、切側體、背體對、合境

對、字對、向對、平對、同文對等、の如き、皆之れを略す、對に

四病あり、前句雙聲、後句直語、或は空談の如き、名づけて

跛對と曰ふ、前句有形、後句無色、前句物色、後句人名、名

づけて眇對と曰ふ、言換り而して意換らざるを、名づけて

合掌對と曰ふ、花柳相對し、龍鳳對を爲すを、名づけて

板腐對と曰ふ、共に皆忌むべし、雙聲は即ち雙聲對、疊韻

詩病

凡詩病有二十四種、其例如左。

第一水渾病、謂五言一六相犯者、犯者、同四聲相犯也、無拘。

第二水滅病、謂五言二七相犯者、無拘、避爲美。

第三木枯病、謂五言三八相犯者、無拘。

第四金缺病、謂五言四九相犯者、無拘。

第五土崩病、上尾、謂五言五十相犯者、避爲可。

第六蜂腰病、謂五言一句中二五相犯者、無拘。

第七鶴膝病、謂五言詩、五字十五字相犯者、無拘。

詩病

凡を詩病に二十四種あり、其の例左の如し。

第一水渾病、五言、一六相犯す者を謂ふ、犯すとは、同四聲相犯すなり、拘ること無かれ。

第二水滅病、五言、二七相犯す者、謂ふ、拘ること無れ、避くるを美と爲す。

第三木枯病、五言、三八相犯す者を謂ふ、拘ること無かれ。

第四金缺病、五言、四九相犯す者を謂ふ、拘ること無かれ。

第五土崩病、一に上尾と曰ふ、五言、五十相犯す者を謂ふ、避くるを可と爲す。

第六蜂腰病、五言、一句中、二五相犯す者を謂ふ、拘ること無かれ。

第七鶴膝病、五言の詩、五字十五字相犯す者を謂ふ、拘ること無かれ。

第八大韻病觸地、謂同韻同聲者、如押新字爲韻、更不可安人津鄰身陳等字也、無拘、避爲佳。

第九小韻病傷音、謂同韻他聲者無拘。

第十傍紐病、一曰大紐、謂句中有月字、更不可安魚元阮願等字也、無拘。

第十一正紐病、一曰小紐、謂句中有壬字、更不可安任任入也。

第十二平頭病、謂五言一六二七竝犯者、以上諸病不足累詩、如能避者彌佳、若立字要切於句調、暢不可移者、不須避之、觀古今名家諸作、可致已。

第十三闕偶病、謂上下不對者。

第十四繁說病、一名相類、謂一意再說者、尤

第八大韻病觸地、謂同韻同聲の者を謂ふ、新の字を押して韻と爲し、更に人津鄰身陳等の字を安くべからざるが如し、拘ること無かれ、避くるを佳と爲す。

第九小韻病傷音、謂同韻他聲の者を謂ふ、拘ること無かれ。

第十傍紐病大紐、謂句中に月の字有れば、更に魚元阮願等の字を安くべからざるを謂ふ、拘ること無かれ。

第十一正紐病小紐、謂句中に壬の字有れば、更に任任入を安くべからざるを謂ふなり。

第十二平頭病、五言一六二七竝に犯す者を謂ふ、以上の諸病詩を累するに足らず、如し能く避くれば彌佳なり、若し字を立つる要切、句に於て調暢移すべからざる者は、須らく之れを避くべからず、古今名家の諸作を觀て致ふべきのみ。

第十三闕偶病、上下對せざる者を謂ふ。

第十四繁說病、一名相類、又一意再說する者を謂ふ、尤も

忌

第十五齟齬病一名不調、謂五言一句中、三字同聲相連者、不必拘、且要下句相承、以均其勢。

第十六叢聚病一名叢木、謂風雲烟霞、氣象相叢

者、可避、地名相叢者、名爲輿地志病、如李白娥眉山月、是妙手、不可引此、塞口、人名多者

名爲點鬼簿病楊炯明故事、數目多者、曰算博士賈

王故、金玉珠璧多用者、曰至寶丹宋王珪故事、服

色多用、曰紉緞簿、器形多、曰骨董簿、俱是叢聚病之類。

第十七忌諱病、如山崩海竭、逆流亂聲等、應制應教之作、宜慎此病、孟襄陽不才明主棄句、悞卻終身、佳城字、卽疑滕公、及侵、天干、天等、名曰形迹病、宜加斟酌、意旨傍觸者、名曰

忌むなり。

二四

第十五齟齬病一名不調、五言一句中に、三字同聲相連なる者を謂ふ、必ずしも拘らざれ、且つ下句相承け以て其の勢を均しくするを要す。

第十六叢聚病一名叢木、風雲烟霞、氣象相叢る者を謂ふ、避くべし、地名相叢る者を名づけて輿地志病と爲す、李白の娥眉山月の如きは、是れ妙手なり、此れを引きて口を塞ぐべからず、人名多きを名づけて點鬼簿病と爲す、楊炯明の數目多きを算博士と曰ふ、賈王と爲す、金玉珠璧多用る者を至寶丹と曰ふ、宋の王珪、服色を多用ふるを、紉緞簿と曰ふ、器形多きを骨董簿と曰ふ、俱に是れ叢聚病の類。

第十七忌諱病、山崩る、海竭く、逆流亂聲、等の如きは、應制應教の作には、宜しく此の病を慎むべし、孟襄陽の「不才明主棄つ」の句は、終身を悞却し、佳城の字は、即ち滕公を疑ふ、及び「天を侵す」「天を干す」等は、名づけて形迹病と曰ふ、宜しく斟酌を加ふべし、意旨傍觸の者を名づけて

傍突病、如二敵不足情、三冬俄已畢、周充、正
 言即佳、反語卻累者、曰翻語病、崔氏曰、伐鼓、
 反語腐骨、是病、此病何必拘拘、俱皆忌諱之
 類。

第十八長攝腰病、又名謂、每句第三字攝上
 下兩字。

第十九長解錠病、一曰散病、謂五言下一字單成
 其意、相速連、此病非病、句中宜有之、若不與
 他相間、則爲病。

第二十支離病、如人人皆偃息、唯我獨從、戒
 無拘、人有感慨、其言輒支離、如詩云我獨賢
 勞是也。

第二十一相濫病、如樹木枝葉、山河水石等、
 一事再用者、上有馳馬飛鏢、下用桃華騎、曰

詩律

傍突病と曰ふ、二敵情に足らず、三冬俄に已に畢る、
 周充の如き正言するは即ち佳なるも、反語は卻つて累す
 る者を翻語病と曰ふ、崔氏曰く、伐鼓、反語腐骨は是れ病
 と、此の病、何ぞ必ずしも拘々せん、俱に皆忌諱の類なり。

第十八長攝腰病、又名謂、每句第三字、上下の兩字を攝
 するを謂ふ。

第十九長解錠病、一に散病、五言の下の一字、單に其の意
 を成して相連なる者を謂ふ、此の病は病に非ず、句中宜
 しく之れ有るべし、若し他と相間らざれば、則ち病と爲
 す。

第二十支離病、一人々皆偃息、唯我獨り戒に從ふの如
 き、拘ること無れ、人、感慨あれば、其の言は輒ち支離す、詩
 に云ふ、我獨り賢勞すの如き、是れなり、

第二十一相濫病、樹木枝葉、山河水石等、一事再用の者
 の如き、上に馳馬飛鏢ありて、下に桃華騎を用ふるを相

相重病枝指、晴雲積霧竝用、曰相及病、二句

一意、無所差別者、如兩成俱臨水、雙城共夾

河庚、曰駢梅病、俱是相濫。

第二十二落節病、如月詩、論華出鳥、春詩、插菊述梅。

第二十三雜亂病、謂首尾錯亂、不能成編者、少年士作絕句轉結難成、起承或律詩先造句、不全起結等、皆有此病、宜戒之。

第二十四文贅病一云俗、謂一字加贅、衆巧皆去、片語落嫌、人競致譏者、作者輕忽彫琢、輒述拙作、皆有此病、勿忽諸、今世作者、不諳詩律、漫然任口綴述、未嘗知四聲爲何物也、故予揭古人所論病目、以示大概者如此。

詩法

重病と曰ふ又、枝指、晴雲積霧竝用ふるを相及病と曰ふ、二句一意差別する所無き者、兩成俱に水に臨み、雙城共に河を夾む庚、が如きを、駢梅病と曰ふ、俱に是れ相濫。

第二十二落節病 月の詩に、華を論じ鳥を出だし、春の詩に、菊を插み梅を述ぶるが如し。

第二十三雜亂病 首尾錯亂、編を成す能はざる者を謂ふ、少年士、絶句の轉結を作るに、起承を成し難し、或は律詩に先づ聯句を造り、起結を全うせざる等、皆此の病有り、宜しく之れを戒むべし。

第二十四文贅病一に涉俗、一字贅を加ふれば、衆巧皆去り、片語嫌に落つれば、人競ふて譏を致す者を謂ふ、作者、彫琢を輕忽にして、輒ち拙作を述ぶ、皆此の病あり、諸れを忽にすること勿れ、今世の作者、詩律を諳んぜず、漫然口に任せて綴述し、未だ嘗て四聲の何物たるを知らざるなり、故に予古人の論ずる所の病目を掲げ、以て大概を示すこと此くの如し。

詩法

五七古風、先分爲幾段、段段過去、節節次序、使事情委曲細說、不許支離雜亂也、每節起句、願上、末句引下、要爲過脈、句數多少、率均斤兩、雖然句勢要通暢不滯、何必闕勢均句乎、古人之詩皆然、夫詩者韻文也、其法猶文章之法、所謂冒頭起首、回環應照、頓挫波瀾、結尾、種種之法、自具其中矣、故曰、非知文章者、不能古風、人多謂詩文二派不相關、大謬矣、蓋詩文詞殊、豈別其脈理乎、詩語婉而易、盡、文語直而無盡、是故詩之至長者、與文之至短者、正相當、可以觀已、詩中多有閑語、卽是波瀾、有確語、占地步、處有再提前語者、深歎處、今引古人詩示法、

姜蕩命

詩律

李白

五七古風、先づ分ちて幾段と爲し、段々過ぎ去り、節々次序し、事情をして、委曲細說せしめ、支離雜亂を許さざらなり、每節起句上を願み、末句下を引き、過脈を爲すを要す、句數の多少、率ね斤兩を均しくす、然りと雖ども、句勢通暢滯らざるを要す、何ぞ必ずしも勢を闕きて句を均しくせんや、古人の詩皆然り、夫れ詩は韻文なり、其の法、猶文章の法のごとし、謂はゆる冒頭起首、回環應照、頓挫波瀾、結尾、種々の法、自ら其の中に具はる故に曰く、文章を知る者に非ざれば、古風なる能はず、人多く謂ふ、詩文二派、相關せずと、大に謬れり、蓋し詩文詞殊なるも、豈に其の脈理を別にせんや、詩語は、婉にして盡き易く、文語は、直にして盡くる無し、是の故に、詩の至長なる者と、文の至短なる者と、正に相當る、以て觀るべきのみ、詩中に多く閑語あり、卽ち是れ波瀾、確語あり、地歩を占むるの處、再び前語を提する者あり、深歎の處、今、古人の詩を引きて法を示す。

姜蕩命

二七

李白

漢帝寵阿嬌、貯之黃金屋、咳唾落九天、隨風生珠玉。

四句二韻、帝天相應、黃金珠玉相應、咳唾生玉、何等風況、三千宮女、悉在口中、囉殺愛、此處揚開一步。

寵極愛還歇、妬深情卻疎、長門一步地、不肯暫廻車。

四句二韻、寵字順上再出、歇字引下三句、一步地、照九天、黃金屋、長門宮、及車、三箇連來出處、進退之地可見、此處抑、不廻車三字收了、引下感歎。

兩落不上天、水覆難再收、君情與妾意、各自東西流。

四句二韻、雨映天、水順地、君妾暗含天地、昔日在天、今日在地上、反覆顛倒之狀、猶水東西分流去也、此處感概。

昔日芙蓉花、今成斷腸草、以色事他人、能得幾時好。

漢帝阿嬌を寵し、之れを黄金の屋に貯ふ、咳唾九天より落つ、風に随つて珠玉を生ず。

四句二韻、帝天相應す、黄金珠玉相應す、咳唾玉を生ず、何等の風況ぞ、三千の宮女、悉く口中に在りて、囉み殺し盡す、此の處揚、一步を開く。

寵極つて愛還た歇み、妬深うして情卻つて疎なり、長門一步の地、肯て暫くも車を廻さず。

四句二韻、寵の字、上を顧みて再出す、歇の字、下三句を引く、一步地は九天を照す、黄金屋、長門宮、及び車、三箇連ね來る、出處進退の地見るべし、此の處抑、車を廻らさずの三字收了、下の感歎を引く。

兩落ちて天に上らず、水覆つて再び收め難し、君が情と妾が意と、各自、自ら東西に流る。

四句二韻、雨は天に映じ、水は地を顧る、君妾は暗に天地を含む、昔日天上に在り、今日地上に在り、反覆顛倒の狀は、猶水の東西に分流し去るがごときなり、此の處感概。

昔日の芙蓉花、今斷腸草と成る、色を以て他人に事ふ、能く幾時の好を得ん。

四句二韻花草色相呼、願上阿嬌愛之如花、蘇之如草、他人字尤切、昔日今日幾時相呼、好字、總照上寵愛等、收了、此處歎息、○此篇二段、四節、每節四句二韻、字字相呼、句句相顧、節節相映、段段相應、不可缺一句、不可去一節、法則尤易看、知、宜、致、

藍田石門精舍

王維

落日山水好、漾舟信歸風、玩奇不覺遠、因以緣源窮。

四句一節、舟中興情、好奇相呼、

遙愛雲木秀、初疑路不同、安知清流轉、偶與前山通。

四句一節、舟中初見石門、愛字願上、前山二字、結上、爲下過脈、以上二節爲前段、凡八句。

捨舟理輕策、果然慳所適、老僧四五人、逍遙蔭松柏。

舟字再出映上、果然慳上疑字、到此與老僧爲逍遙遊之樂、只覺捨舟不早、已松栢太妙、初云、

詩律

四句二韻花草色相呼、上の阿嬌を顧る、之れを愛する花の如く、之れを疎んずる草の如し、他人の字尤も切なり、昔日今日幾時相呼ぶ、好の字、總て上の寵愛等を照して收了す、此の處歎息、○此の篇二段、四節、每節四句二韻、字に相呼び、句々相顧み、節々相映じ、段々相應す、一句を欠ぐべからず、一節を去るべからず、法則尤も看知り易し、宜しく致ふべし。

藍田の石門精舍

王維

落日山水好し、舟を漾して歸風に信す、奇を玩びて遠きを覺えず、因は源のに縁り縁て窮む。

四句一節、舟中の興情、好奇相呼ぶ。

遙に愛す雲木の秀、初て疑ふ路同じからざるかと、安ぞ知らん清流の轉するを、偶、前山と通す。

四句一節、舟中初て石門を見る、愛の字上を顧る、前山の二字、上を結び、下の過脈を爲す、以上二節を前段と爲す、凡て八句。

舟を捨て、輕策を理す、果然適く所に慳ふ、老僧四五人、逍遙松栢に蔭す。

舟の字再出上に映す、果然は上の疑の字に應ず、此に到りて、老僧と逍遙遊の樂みを爲す、只だ覺ゆ舟を捨

雲木、次云前山、今云松栢、言、響所、秀者、到此始知松栢引下四句、一節、

朝梵林未曙、夜禪山更寂、道心及牧童、世事問樵客。

朝梵夜禪、自老僧來、二六時無間斷之狀、林字對松栢、牧童樵客、對老僧、俱了道心、何只四五人、四句一節、二節合爲前大節。

冥宿長林下、焚香臥瑤席、澗芳襲人衣、山月

映石壁。

性本玩奇、況問世事、必有了心、宜哉一宿焚香、不凡澗芳照山、月映夜、風景尤佳、一宿不虛哉、四句一節、駢字通韻。

再尋畏、迷誤、明發更登歷、笑謝桃源人、花紅復來觀。

地比桃源、自爲漁父、餘意飄逸、玩可、明發對上、更登、全是玩奇、形體來觀、亦是不覺、遠模、歷、觀通韻、四句一節、二節合爲後大節、二大節合爲後段、前段二節、八句四韻、後段二大節、十六

つる早からざるのみ松栢太だ妙、初めに雲木を云ひ、次に前山を云ひ、今、松栢を云ふ、響の秀つる所の者、此に到りて始めて松栢なるを知るを言ひて下四句を引く、一節。

朝梵林未だ曙けず、夜禪山更に寂たり、道心牧童に及ぶ、世事樵客に問ふ。

朝梵夜禪は老僧より來る、二六時に間斷無きの狀、林の字は松栢に對し、牧童樵客は老僧に對す、俱に道心を了す、何ぞ只だ四五人のみならん、四句一節、二節合して、前の大節と爲す。

冥宿す長林の下、香を焚いて瑤席に臥す、澗芳人衣を襲ふ、山月石壁に映す。

性本と奇を玩す、況んや世事を問ふ、必ず了心有らん、宜なるかな、一宿香を焚く、凡ならず、澗芳山を照し、月は夜に映じ、風景尤も佳なり、一宿慮しからざるをや、四句一節、壁の字通韻。

再尋迷誤せんことを畏る、明發更に登歷す、笑ふて桃源の人に謝す、花紅復た來り觀ん。

地、桃源に比す、自は漁父たり、餘意飄逸、玩ふべし、明發は上に對し、更登は、全く是れ奇を玩ぶの形體、來觀も、亦是れ遠きを覺えざるの模様、歷觀は通韻、四句一節、二節合して、後の大節を爲す、二大節合して、後段と爲す。

句九
韻。

喜鄭三見過

劉長卿

客舍逢君未授衣、閉門愁見桃花飛、遙想故
園今已爾、家人應念行人歸。四句言旅況、客舍故園家人相

呼、念、願、映、念

寂寞垂楊映、深曲、長安日暮雲臺宿、窮巷無

人鳥雀閑、空庭新雨莓苔綠。四句言客舍景色。

此中分與故交疎、何幸仍回長者車、十年未

稱平生意、好得辛勤謾讀書。四句言喜意、長者對君。○此篇

三韻、每韻四句三韻。

兵車行

杜甫

車麟麟、馬蕭蕭、行人弓箭各在腰、爺娘妻子

走相送、塵埃不見咸陽橋、牽衣頓足攔道哭、

哭聲直上干雲霄。六句一節、蕭蕭四、車馬弓箭相呼、行人爺孃妻子相

詩律

す、前段の二節、八句四韻、後段二大節、十六句九韻。

鄭三の過らるゝを喜ぶ

劉長卿

客舍君に逢ふて未だ衣を授けず、門を閉ち愁へて見る桃
花の飛ぶを遙に故園を想ふて今已に爾り、家人應に行
人の歸るを念ふなるべし。

四句、旅況を言ふ、客舍、故園、家人、相呼ぶ、愁念、願映。

寂寞たり垂楊深曲に映ず、長安日暮雲臺の宿、窮巷人無
く鳥雀閑なり、空庭の新雨莓苔緑なり。

四句、客舍の景色を言ふ。

此の中分れて故交と疎なり、何の幸か仍ほ長者の車を回
す、十年未だ平生の意に稱はず、好得辛勤謾に書を読む。

四句、喜意を言ふ、長者は君に對す、○此の篇三節、每節
四句三韻。

四句三韻。

兵車行

杜甫

車麟々、馬蕭蕭、行人弓箭各腰に在り、爺孃妻子走りて
相送る、塵埃見えず、咸陽橋、衣を牽き足を頓し道を攔つ
て哭す、哭聲直に上つて雲霄を干す。

六句一節、蕭蕭四、車馬と弓箭と相呼ぶ、行人爺孃妻

連哭聲引下、此言行人上道之狀、加見如畫。

道傍過者問行人、行人但云點行類。二句小

二、過者行人相伴、但云二字、哭泣不能、多言、模倣、此言傍人認哭聲、以慰之狀、點行引下、以上一節。

或從十五北防河、便至四十西營田、去時里

正與襄頭、歸來頭白還戍邊。二、四句一節、先頭

白相呼、里正伏下、縣官戍邊引下。

邊庭流血成海水、武皇開邊意未已。二句、小

小節、以均其勢、支韻二、二邊字、應上、以見開口、即言邊意、流血、開邊、承上、言行役之苦、武皇引下、以上一大節、共一段。

君不見漢家山東二百州、千村萬落生荆杞。

二句小節、尤韻二、漢家、應上、伏下、秦兵、村落引下、此承上言行役無功、徒苦之狀、二百千萬、應

上十五、四、十、言、民、荒。

縱有健婦把鋤犁、禾生隴畝無東西、况復秦

子相連哭聲、下を引く、此は行人道に上るの狀を言ふ、見るが如く、畫くが如し。

道傍過ぐる者行人に問ふ、行人但だ云ふ點行類なりと。

二句小節、真韻二、過者と行人と相伴ふ、但云の二字は、哭泣して多言する能はざるの模様、此は傍人哭聲を認めて以て慰むるの狀を言ふ、點行下を引く、以上一大節。

或は十五從り北、河を防ぎ、便ち四十に至つて西田を營す、去る時里正與に頭を裏む、歸來頭白還た邊を成る。

四句一節、先韻二、十五四十、頭白、相呼ぶ、里正は、下の縣官を伏し、邊を成るは、下を引く。

邊庭の流血海水を成す、武皇邊を開いて意未だ已まず。

二句小節、上の小節に應じて以て其の勢を均す、支韻二、二の邊の字上に應ず、以て口を開けば即ち邊を言ふの意を見る、流血邊を開く、上を承けて行役の苦を言ふ、武皇下を引く、以上一大節、共一段。

君見ずや漢家山東の二百州、千村萬落荆杞を生ず。

二句小節、尤韻二、漢家、上に應じ、下の秦兵を伏す、村落、下を引く、此は上を承けて行役功無く、徒苦の狀を言ふ、二百千萬、上の十五四十に應じ、民荒を言ふ。

縱ひ健婦有つて鋤犁を把るも、禾は隴畝に生じて東西無

兵耐苦戰被驅不異犬與鷄。四句一節、齊韻。三承上言、無男

子舊野就寔之狀、鷄犬輕民意、伏下百草、秦兵映上、鷄擊鼙鼓相連、伏下租稅、以上一大節。

長者雖有問、役夫敢伸恨。二句小節、上變、

役者外苦之狀、長者願上過者、恨字映上、哭聲、伏下煩冤。

且如今年冬、未休關西卒。縣官急索租、租稅

從何出。四句一節、五言、上變、上承上、

映里正、以上一大節。

信知生男惡、反是生女好。生女猶得嫁、比鄰

生男埋沒隨百草。四句一節、五言、二句七言、二

承上、言爺嬾心事、即是役夫妻子落著之地、初云行人、中云鷄犬、下云百草、自有次第、可味爺

嬾心中、以上一段。

君不見青海頭、古來白骨無人收。新鬼煩冤

し、況んや復た秦兵苦戰に耐へたるをや、驅られて犬と鷄とに異ならず。

四句一節、齊韻三、上を承けて、男子無く、舊野荒に就くの狀を言ふ、鷄犬は民を輕んずるの意、下の百草を伏す、秦兵は上に映じ、鼙鼓相連りて、下の租稅を伏す、以上一大節。

長者問ふ有りと雖ども、役夫敢て恨を伸べんや。

二句小節、上に應じて句を變ず、願韻二、上を承けて、役者外苦の狀を言ふ、長者は、上の過者を願る、恨の字は、上の哭聲に映じ、下の煩冤を伏す。

且つ今年の冬の如き、未だ關西の卒を休せず、縣官急に租を索む、租稅何れ從り出でん。

四句一節、五言、上に應じて句を變ず、質韻二、上を承けて、妻子内苦の狀を言ふ、關西は、上の秦兵に應ず、縣官は、里正に映す、以上一大節。

信に知る男を生むは悪しく、反つて是れ女を生むの好きを、女を生めば猶比鄰に嫁するを得、男を生めば埋沒して百草に隨ふ。

四句一節、五言、二句、七言、二句、上に應じて句法交錯、皓韻二、總て上を承けて、爺嬾の心事を言ふ、初ち是れ役夫妻子落著の地、初に行人を云ひ、中に鷄犬を云ひ、下に百草を云ふ、自ら次第あり、爺嬾の心中を味ふべし、以上一段。

君見ずや青海の頭、古來白骨人の收むる無し、新鬼は煩

舊鬼哭、天陰、雨濕聲、啾啾。四句一段、尤韻三、承上五言特變起。

句總言哀恨、嗟嘆之情、青海、應上地名、白骨、映上埋沒、新鬼、舊鬼、終上行役之數、天陰、遙應、雲、管、啾啾、連字韻、繳上轉、蕭、蕭、○凡三段、前段大節二、小節二、小節在大節下、中段大節三、小節二、小節在大節上、錯綜變法、末段大節一、凡三十六、句平韻十六、側韻八、凡二十四韻。

五七言律詩、起二句爲破題、次二句爲領聯、要承上、次二句爲景聯、要轉下、末二句爲結句、猶絕句起承轉結也、雖然、古人援筆之間、變化隨宜、未必一樣也、有前四句後四句者、爲正體、有前後四句、中間四句者、有前二句後六句者、有前六句後二句者、皆爲變體、二首以上、五首十首者、總爲一首、初一首是起、終一首是結、中間幾首是事情反覆、鋪敘、猶古詩排律也、如杜甫何將軍十首、秋興八首、

寔し舊鬼は哭す、天陰り雨濕ふて聲啾々。

四句一段、尤韻三、上の五言を承ひ、特に起句を變ず、總て哀恨、嗟嘆の情を言ふ、青海は上の地名に應じ、白骨は上の埋沒に映じ、新鬼、舊鬼は上の行役の數々を終ふ、天陰は遙に雲管に應じ、啾々は連字韻、上の繳々、蕭々に應ず、○凡て三段、前段は大節二、小節二、小節は大節の下に在り、中段は大節三、小節二、小節は大節の上に在り、錯綜法を變ず、末段は大節一、凡て三十六句、平韻十六、側韻八、凡て二十四韻。

五七言律詩、起二句を破題と爲し、次の二句を領聯と爲し、上を承くるを要す、次の二句を景聯と爲し、下に轉ずるを要す、末の二句を結句と爲す、猶絶句の起承轉結のごときなり、然りと雖ども、古人筆を援るの間、變化宜しきに隨ふ、未だ必ずしも一樣ならざるなり、前四句後四句の者あり、正體と爲す、前後四句、中間四句の者あり、前二句後六句の者あり、前六句後二句の者あり、皆變體と爲す、二首以上、五首十首の者は、總て一首と爲す、初の一首は是れ起、終の一首は是れ結、中間幾首は是れ事情反覆、鋪敘、猶古詩排律のごときなり、杜甫の何將軍十首、秋興八首、咏懷古跡五首の如きは、皆此の法を用ふ、五七言絶句も亦同じ、李白の秋浦の歌十七首の如し、是の故に、二三首以上、十首十五首の者、特に中間の一首を讀むも、其

咏懐古跡五首皆用此法、五七言絶句亦同、
 如李白秋浦歌十七首、是故二三首以上、十
 首十五首者、特讀中間一首、不通其義、問有
 焉、如唐詩選白髮三千丈、不可解其義、可以
 見已。

早發平昌島前後四句、中 沉佺期

解纜春風後、鳴榔曉漲前、前二句 陽鳥出海
 樹、雲鴈下江烟、積氣衝長島、浮光溢大川、中
 句、不能懷魏闕、心賞獨冷然、後二句

塞下曲 李白

塞虜乘秋下、天兵出漢家、前二句 將軍分虎
 竹、戰士臥龍沙、塞下 邊月隨弓影、朝霜拂劍
 花、塞下景、中 玉關殊未入、少婦莫長嗟、後二句

情安

詩律

の義に通ぜざるもの間、有り、唐詩選の「白髮三千丈」の
 如き、其の義を解すべからず、以て見るべきのみ。

早に平昌島を發す前後四句、中 沉佺期

纜を解く春風の後、榔を鳴らす曉漲の前、二句舟 陽鳥海
 樹を出で、雲鴈江烟に下る、積氣長島を衝き、浮光大川に
 溢る、中四句 魏闕を懷ふ能はず、心賞獨り冷然、後二句

塞下曲 李白

塞虜秋に乗じて下り、天兵漢家を出づ、前二句は 將軍虎竹
 を分ち、戰士龍沙に臥す、塞下 邊月弓影に隨ひ、朝霜劍花
 を拂ふ、塞下の景、中 玉關殊に未だ入らず、少婦長嗟する莫
 れ、後二句は 長安の情、

侍宴安樂公主新宅應制 蘇頌

駉駉羽騎歷城池、帝女樓臺向晚披、前露灑

旌旗雲外出、風迴巖岫雨中移、當軒半落天

河水、遠逕全低月樹枝、中簫鼓宸遊陪宴

日、和鳴雙鳳喜來儀、後

大原早秋前四句後四句格

李白

歲落衆芳歇、時當大火流、霜威出塞早、雲色

渡河秋、前四句夢遶邊城月、心飛故國樓、思

歸若汾水、無日不悠悠、後四句

登岳陽樓

杜甫

昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤

日夜浮、前四句親朋無一字、老病有孤舟、戎

馬關山北、憑軒涕泗流、後四句

返照

安樂公主的新宅に侍宴す、應制 蘇頌

駉々たる羽騎城池を歴、帝女の樓臺晚に向つて披く、前

露は旌旗に灑いで雲外に出て、風は巖岫を廻つて雨中に

移る、軒に當つて半は落つ天河の水、逕を迷つて全く低

る月樹の枝、中四句簫鼓宸遊宴に陪する日、和鳴雙鳳來

儀を喜ぶ、後

李白

歲落衆芳歇む、時は大火の流るゝに當る、霜威塞を出づ

る早く、雲色河を渡りて秋なり、前四句夢は遶る邊城

の月、心は飛ぶ故國の樓歸るを思ふこと、汾水の若し、日

として悠々ならざるは無し、後四句

杜甫

昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓、吳楚東南に坼け、乾坤日

夜に浮ぶ、前四句親朋一字無く、老病孤舟有り、戎馬關山

の北、軒に憑つて涕泗流る、後四句

返照

楚王宮北正黃昏、白帝城邊過雨痕、返照入

江翻石壁、歸雲擁樹失山村前、衰年病肺惟

高枕絕塞愁、時早閉門、不可久留豺狼亂、南

方實有未招魂後、

永嘉浦逢張子容前六後二格、孟浩然

逆旅相逢處、江村日暮時、衆山遙對酒、孤嶼

共題詩、麻宇陵、鮫室人烟接、島夷前六句相

鄉園萬餘里、失路一相悲後二句旅情

曉望

白帝更聲盡、陽臺曉色分、高峰上、寒日疊巒

宿羶雲、地坼江帆隱、天清木葉聞前、荆扉對

麋鹿、應共爾爲群後二、

黃鶴樓 崔顥

昔人已乘白雲去、此地空餘黃鶴樓、黃鶴一

詩律

楚王宮北正に黃昏、白帝城邊過雨の痕、返照江に入つて

石壁を翻し、歸雲樹を擁して山村を失す前、衰年病肺を病

んで惟だ高枕、絶塞時を愁へて早く門を閉づ、久しく豺

狼の亂に留る可からず、南方實に未だ招かざるの魂有

り後四、永嘉浦に張子容に逢ふ前六後二の格、孟浩然

逆旅相逢の處、江村日暮の時、衆山遙に酒に對し、孤嶼共

に詩を題す、麻宇陵を凌ぎ、人烟嶋夷に接す前六句相

郷園萬餘里、失路一に相悲しむ後二句旅情

曉望

白帝更聲盡き、陽臺曉色分る、高峰寒日上り、疊巒羶雲宿

す、地坼けて江帆隱れ、天清くして木葉聞ゆ前、荆扉麋鹿

に對し、應に爾と共に群を爲すべし後二、

黃鶴樓 崔顥

昔人已に白雲に乗つて去る、此の地空しく餘す黃鶴樓、

三七

去不復返、白雲千載空悠悠、晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、前六、日暮鄉關何處是、烟波江上使人愁、後二、

長安曉望

司空曙

迢遞山河擁帝京、參差宮殿接雲平、風吹曉漏、經長樂、柳帶晴烟出禁城、天淨笙歌臨路發、日高車馬隔塵行、前六句、獨有淺才甘未達、多慚名在魯諸生、後二句、

過揚氏別業

前二句後六句格

王維

揚子談經處、淮王載酒過、前二相過、興闌啼鳥換、坐久落花多、徑轉迴銀燭、林開散玉珂、嚴城時未啓、前路擁笙歌、後六過、後風景、

秋夕寄懷契上人

皇甫曾

已見槿花朝委露、獨悲孤鶴在人羣、前二、真僧

黃鶴一去復返らず、白雲千載空しく悠悠、晴川歴々たり、漢陽樹、芳草萋々たり、鸚鵡洲、前六、日暮鄉關何の處か是なる、烟波江上人をして愁へしむ、後二

長安曉望

司空曙

迢遞たる山河帝京を擁す、參差たる宮殿雲に接して平かなり、風は曉漏を吹いて長樂を經、柳は晴烟を帯びて禁城を出づ、天淨うして笙歌路に臨んで發し、日高うして車馬塵を隔て、行く、前六句、獨り淺才の未達に甘する有り、多く慚つ名の魯の諸生に在るを、後二句、感概、

揚氏の別業

前二句後六句の格

王維

揚子經を談ずるの處、淮王酒を載せて過ぐ、前二相過、興闌にして啼鳥換り、坐久うして落花多し、徑轉じて銀燭を廻らし、林開いて玉珂を散す、嚴城時に未だ啓かず、前路笙歌を擁す、後六過、後風景、

秋夕、契上人に寄懷す

皇甫曾

已に見る槿花の朝に露に委するを、獨悲む孤鶴の人羣に

出世心無事、靜夜名香手自焚、臆臨絕澗聞
 流水、客至孤峯掃白雲、更想清晨誦經處、獨
 看松上雪紛紛後六、

以上律法如此、作者熟得此處、縱橫自辨、情
 景相半、輕重必均、爲佳、雖然老煉之後、情景
 錯出、全如無倫、虛實相混、時出度外、則又非
 造次所能也、且製句之道、各有其宜、須律絕
 移徙不得、五七加減不得、方是、所以律有律
 句、絕自絕句、五言要、不縮急、七言要、不漫寬、
 句要藏字、字要藏句、如連珠不斷、方妙、作者
 多用襯字、加減一句、大非。

排律體、正律之變也、首尾排句、對偶精密、與
 律詩差別、轉換鋪叙之法、全與古詩全、有三
 要、要格調整嚴、要體骨勻稱、要句法變化、有

詩律

在るを、眞僧世を出づる心無事、靜夜名香手自ら焚く、
 臆は絶澗に臨んで流水を聞き、客は孤峰に至つて白雲を
 掃ふ、更に想ふ清晨經を誦するの處、獨看る松上の雪紛
 々後六、

以上律法此くの如し、作者、此の處を熟得し、縱橫自ら辨
 じ、情景相半し、輕重必ず均す、佳と爲す、然りと雖ども、老
 煉の後、情景錯出、全として倫無きが如く、虛實相混じ、時
 に度外に出づるは、則ち又造次の能くする所に非ざるな
 り、且つ句を製するの道は、各其の宜しきあり、須らく
 律絶移徙し得ず、五七加減し得ざるべし、方には是なり、律
 には律句あり、絶は自ら絶句、五言は、縮急ならざるを要
 し、七言は、漫寬ならざるを要す、句は字を藏するを要し、
 字は句を藏するを要す、連珠の斷えざるが如く、方に妙
 なる所以なり、作者、多く襯字を用ひて、一句を加減する
 は、大だ非なり。

排律の體は、正律の變なり、首尾排句、對偶精密、律詩と差
 別なり、轉換鋪叙の法は、全く古詩と全じ、三要有り、格調
 の整嚴を要し、體骨の勻稱を要し、句法の變化を要す、三
 忌有り、疣贅を忌み、支離を忌み、叢聚を忌む。

三忌忌疣贅忌支離忌叢聚。

至麓山寺過法崇師故居 劉長卿

山僧候谷口石路拂莓苔深入泉源去遙從

樹抄回入山香隨青靄散鐘過白雲來野雪

空齋掩山風古殿開至寺桂寒知自發松老

問誰栽放居惆悵湘江水何人更渡杯感歎

奉和幸韋嗣立山莊應制 李嶠

南洛師臣契東巖王佐居幽情遺絃冕宸眷

矚樵漁幽居制下峒山蹕恩回瀾水輿松門

駐旌蓋薛幄引簪裾幸莊石磴平黃陵烟樓

半紫虛雲霞仙路近琴酒俗塵疎幽居喬木

千齡外懸水百尺餘崖深經煉藥穴古舊藏

畫樹宿搏風鳥池潛縱壑魚幽居寧知天子

貴尙憶武侯廬贊歎

麓山寺に至り、法崇師の故居に遡る 劉長卿

山僧谷口に候す、石路莓苔を拂ふ、深く泉源に入り去

り、遙に樹抄より回る、山に入、香は青靄に隨ふて散じ、鐘

は白雲を過ぎて来る、野雪空齋掩はれ、山風古殿開く、至る寺に

桂寒くして知んぬ自ら發くを、松老いて誰か栽うる

か、と問ふ、故居惆悵す湘江の水何人か更に杯を渡さん、感嘆

韋嗣立の山莊に幸するに奉和す、應制 李嶠

南洛師臣の契、東巖王佐の居、幽情絃冕を遺れ、宸眷樵漁

に矚す、幽居制は下る、峒山の蹕、恩は回る、瀾水の輿、松門

旌卓を駐め、薛幄簪裾を引く、幸莊石磴陸平か、烟樓紫

虛に半ばなり、雲霞仙路近く、琴酒俗塵疎なり、幽居喬木

千齡の外、懸水百尺餘、崖深ふして、經に藥を煉り、穴古り

て、舊と書を藏す、樹には宿す風に搏つ、の鳥、池には潛む

壑に、縦いまゝなる魚、幽居寧知天子の貴きを尙

は武侯の廬を憶ふ、贊歎

五七言絶句、竝難作、要長事短語、要字乏意、富要言、易盡味有餘、愈讀愈有味、爲佳、五言用拗體、七言不可拗體、有前對體、有後對體、是絶句中之一體、必勿如律詩前後半片、是爲難、絶句之法、要可互成、以第一句接第三句、以第二句接第四句、是古人之常法也、作者誤認起承轉合來、第三轉句、全然轉去、不要接上、大致雜亂、宜戒之、此示其法。

易水送別

駱賓王

此地別燕丹、太子荆軻、不長生、壯士髮衝冠、其形凜然、昔時人已沒、二人死、今日水猶寒、猶覺凜然、

別杜審言

宋之間

臥病人事絶、不能送、嗟君萬里行、何只余一人、河橋不相送、臥病、江樹遠含情、江樹情、

詩律

五七言絶句、竝に作り難し、長事短語を要し、字乏く意富むを要し、言は盡き易く、味は餘りあらざるを要す、愈々讀みて愈々味あるを佳と爲す、五言は拗體を用ふ、七言は拗體に可ならず、前對體あり、後對體あり、是れ絶句中の一體、必ず律詩の前後半片なる如くする勿れ、是れを難しと爲す、絶句の法は、互成すべきを要す、第一句を以て、第三句に接し、第二句を以て第四句に接す、是れ古人の常法なり、作者、起承轉合を誤認し來りて、第三轉句、全然轉じ去りて、上に接するを要せず、大に雜亂を致す、宜しく之れを戒むべし、此に其の法を示す。

易水送別

駱賓王

此地燕丹に別る、太子荆軻、壯士髮冠を衝く、其の形昔時人已に沒し、二人死、今日水猶寒し、猶覺凜然たるを覺ゆ。

杜審言に別る

宋之間

臥病人事絶す、人を送る能はず、嗟す君が萬里の行、何ぞ只余一人ら、河橋相送らざる故なり、江樹遠く情を含む、江樹別れを惜む況むや。

四一

南樓望

盧僕

去國三巴遠歸心傷、登樓萬里春風景之日、傷
心江上客去國太遠故、不是故鄉人此意如何、

自君之出矣

張九齡

自君之出矣思切、不復理殘機哀悲憔悴、思君
如滿月君不在故、夜夜滅清輝顏色憔悴不能理機、

送朱大入秦

孟浩然

遊人五陵去分手無雙、寶劍直千金可爲分手字、
將去脫相贈、平生一片心不情千金只表寸心、

送杜十四之江南

荆吳相接水爲鄉征帆所泊、君去春江正淼茫斷、
斷日暮征帆何處泊必在荆吳間、天涯一望斷人

腸望來、
斷淼茫、

余が手を分つ
に於てをや、

南樓望

盧僕

國を去つて三巴遠し歸心日傷む、樓に登る萬里の春風景の日、必ず
故人を心を傷ましむ江上の客去る太だ、是れ故郷の
人にあらず故人の樂を同じうす、

君の出でし自り

張九齡

君の出でしより思切、復た殘機を理せず懶の故ならず、君
を思ふ滿月の如く、君が在らざる故なり、夜夜清輝を滅す顏色憔悴、
る能はず、上二
字、下八字句、

朱大が秦に入るを送る

孟浩然

遊人五陵に去る手を分、寶劍直千金可と爲、手を分ち
句、人將に去脱して相贈る、平生一片の心千金を惜まず只、
らんとす、

杜十四の江南に之くを送る

荆吳相接して水を郷と爲す征帆の泊、君去つて春江正に
淼茫斷、日暮征帆何の處にか泊す必ず荆吳の、
人腸を斷つ望み來れ、
斷淼茫、

蛾眉山月歌

李白

蛾眉山月半輪秋、影入平羌江水流。
夜發清溪向三峽、思君不見下渝州。

影、月

閨怨

王昌齡

閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓。
忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯。

除夜作

高適

旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然。
白頭故鄉今夜思千里、愁鬢明朝又一年。

以上絶句大法、作者要熟此法、熟來自辨、古人絶句、第二突然不承、如寶劍直千金、太妙、

詩律

蛾眉山月の歌

李白

蛾眉山月半輪の秋、影は平羌江水に入つて流る。
夜に隨ひ、夜清溪を發して三峽に向ふ。君を思ふて見えず、渝州に下る。

閨怨

王昌齡

閨中の少婦愁を知らず、未だ物に感ぜざるが故なり、春日粧を凝らして翠樓に上る。夫婿を憐れ、誰か忽ち見る陌頭楊柳の色、悔ゆるらば夫婿をして封侯を覓めしむるを。

除夜の作

高適

旅館の寒燈獨り眠らず、必ず故郷を思ふ、客心何事ぞ轉々凄然、白頭故郷今夜千里を思ふ、愁鬢明朝又一年。

以上は絶句の大法、作者、此の法に熟せんことを要す、熟し來らば自ら辨せん、古人の絶句、第二突然として承け

四三

宜於此處用工。

詩評

王維和賈至早朝詩、絳幘曉籌、翠雲裘闥闔、宮殿、衣冠、冕旒、仙掌、袞龍、詔珮等、疊用、李白峨眉山月詩、峨眉山、平羌江、清溪、三峽、渝州等地名、疊用、蘇頲和幸望春宮詩、宮中城上、回輦處、舞觴前等、疊用、又和幸太平公主莊詩、樓下、橋頭、花間、竹裏、雲漢等、疊用、共皆叢聚病、未免疵瑕也、若取爲詩格、必引外人癡咲。

心事竟誰知、月明花滿枝、曲中人不見、江上數峯青、此等結法太妙手、其人心、中悲切、不得一語、只有眼前之景、祇見其無何狀、可味。劉夢得金陵懷古、有絕唱之目、予謂篇中王

す、寶劍直千金の如き、ただ妙、宜しく此の處に於て工を用ふべし。

詩評

王維の賈至の早朝に和するの詩は、絳幘曉籌、翠雲裘闥闔、宮殿、衣冠、冕旒、仙掌、袞龍、詔珮等、疊用す、李白の峨眉山月の詩は、峨眉山、平羌江、清溪、三峽、渝州等の地名、疊用す、蘇頲の望春宮に幸せらるゝに和する詩は、宮中、城上、回輦處、舞觴前等、疊用す、又太平公主の莊に幸せらるゝに和する詩は、樓下、橋頭、花間、竹裏、雲間等、疊用す、共に皆叢聚病にして、未だ疵瑕を免れざるなり、若し取りて詩格と爲さば、必ず外人の癡咲を引かん。

「心事竟に誰か知らん、月明にして花、枝に滿つ、曲中人見えず、江上數峯青し、此等の結法、ただ妙手、其の人の心中悲切、一語を得ず、只だ眼前の景有り、祇に其の何んする無きの狀を見る、味ふべし、味ふべし。」

劉夢得の金陵懷古は、絶唱の目あり、予謂へらく、篇中の

濟王氣二王重出、諸選多作西晉樓船、卽不應鐵鎖、承句金陵王氣、不可換一字、則二王重出、前聯鐵鎖、以顯王軍功、此時四將俱下、王濟鐵鎖大功、則王濟不可換字也、難哉全壁。

李白清平調、雲想衣裳、以葉比雲、楚詞云、青雲衣兮白霓裳、蓋出于此、以對下瑤臺群玉、做仙女來、是李妙手、徐氏筆精云、蔡端明會書、此詩作葉想衣裳、劉后村以爲落筆之誤、非也、蓋端明書不苟作、况首字安得誤、細味之、葉想衣裳、固自與牡丹穩帖、差勝雲字、蓋以葉比衣、卽是凡筆易易已、况不對下群玉瑤臺、其音亦促、是必後人不知詩者之所爲也、劉爲得、王勃蜀中九日、鴻鴈那從北地來、

王濟王氣二王重出、諸選多作西晉樓船に作る、卽ち鐵鎖に應せず、承句の金陵の王氣は、一字を換ふべからず、則ち二王重出、前聯鐵鎖以て王の軍功を顯はす、此の時、四將俱に下る、王濟の鐵鎖大功あり、則ち王濟は、字を換ふべからざるなり、難いかな全壁。

李白の清平調の「雲には衣裳を想ふ」は、葉を以て雲に比す、楚詞に云ふ「青雲の衣や白霓裳」と蓋し此に出づ、以て下の瑤臺群玉に對し、仙女と做し來る、是れ李の妙手、徐氏筆精に云ふ「蔡端明會て此の詩を書して、葉には衣裳を想ふ」に作る、劉后村以爲へらく、落筆の誤りと、非なり、蓋し端明書苟も作らず、況んや首字安ぞ誤るを得んと、細に之れを味へば、葉には衣裳を想ふは、固より自ら牡丹と穩帖、差、雲の字に勝れり、蓋し葉を以て衣に比す、卽ち是れ凡筆易々のみ、況んや下の群玉瑤臺に對せず、其の音も亦促、是れ必ず後人詩を知らざる者の爲す所ならん、劉得たりと爲す、王勃の蜀中九日の「鴻雁那ぞ北地從り來る」は、那の字太だ玲瓏、決して「何奈等の字を用ふべからず、劉廷琦の句に「況んや復た當時歌舞の

那字太玲瓏、決不可用何奈等字、劉廷琦句、況復當時歌舞人、不可云況是、若改作況是當年、稍可、張說句、聞道神仙不可接、不可云不易也、今日作者下字漫然、不知古人用處、必有疑會矣、李笠翁會論此意云、雲淡風輕近午天、此等句法、自然見好、若變爲風輕雲淡近午天、則雖有好句、不奪目矣、必須再易數字、始能合拍、或改爲風輕雲淡午近天、或又改爲風輕午近雲淡天、此等句法、揆之音律、則或諧矣、苟以文理繩之、尙得名爲詞曲乎。

女仙外史云、敬亭山有萬松亭、亭中刻唐人李白詩云、其詩獨去閑、作獨自還、獨自還、卽是口語、獨去閑、卽是含意、上二句做口語

人をや「は況是」と云ふべからず、若し改めて「況是當年」に作らば、稍や可なり、張說の句に「聞道く神仙は接す可からず」と、易すからずと云ふ可からず、今日の作者、字を下すこと漫然、古人の用處、必ず疑會あるを知らず、李笠翁、曾て此の意を論じて云ふ、雲淡く風輕し、近午の天、此等の句法、自然に好きを見る、若し變じて「風輕く雲淡し、近午の天」と爲さば、則ち好句ありと雖ども、目を奪はず、必ず須らく再び數字を易ふべし、始めて能く拍に合はん、或は改めて「風輕く雲淡し、午近の天、或は又改めて「風輕く、午近雲淡の天」と爲さば、此等の句法、之れを音律に揆れば、則ち或は諧はん、苟も文理を以て之れを繩さば、尙ほ名づけて詞曲と爲すを得んや。

女仙外史に云ふ、敬亭山に萬松亭有り、亭中に唐人李白の詩を刻す、云々、其の詩に「獨去閑を獨自還」に作る、獨自還は、卽ち是れ口語、獨去閑は、卽ち是れ含意、上の二句口語と做し去り、第三句始めて厭はざるの語を下す、太

去第三句始下「不厭的語、太妙。

婦人稱居士者、宋李格女、李清照、號易安居士、有題八咏樓詩、又朱淑真、號幽棲居士、明孟澄女孟淑卿、號荆山居士、有春歸詩、陳孟賢侍姬、號梅華居士。

杜詩牽牛出河西、織女處其東、注家云、牽牛在河東、織女在河西、公涉筆偶誤也、余意、天者左旋而日月右行、故從天言、則織女在河西、從日月星、則牽牛在河西、蓋天地異方、何杜筆誤、周禮司徒云、日南則景短多暑、言夏至之月也、從地言、則日北、日北則景長多寒、言冬至之月也、從地則日南、又左氏昭公四年傳云、日在北陸則藏冰、從地言、則冬至日在南方、然則杜氏達象緯之學者、不可妄駁。

詩律

だ妙。

婦人に居士と稱する者は宋の李格の女李清照、易安居士と號す、八詠樓に題する詩あり、又、朱淑真、幽棲居士と號す、明の孟澄の女孟淑卿、荆山居士と號す、春歸の詩あり、陳孟賢の侍姬、梅華居士と號す。

杜詩に牽牛河西に出づ、織女其の東に處ると、注家云ふ、牽牛河東に在り、織女河西に在り、公涉筆偶誤るなりと、余意ふ、天は左旋して而して日月は右行す、故に天より言へば、則ち織女は河西に在り、日月星よりすれば、則ち牽牛は河西に在り、蓋し、天地方を異にす、何ぞ杜筆の誤りならんや、周禮司徒に云ふ、日南すれば、則ち景短くして暑多し、夏至の月を言ふなり、地より言へば、則ち日北すれば、則ち景長くして寒多し、冬至の月を言ふなり、地よりすれば、則ち日南す、又、左氏昭公四年の傳に云ふ、日、北陸に在れば、則ち冰を藏すと、地より言へば、則ち冬至、日南方に在りと、然らば、則ち杜氏は象緯の學に達する者、妄に駁すべからざるなり。

四七

也。

七言絶句用通韻者、古人多概第一句、若其第二句通韻者、如盧弼邊庭春怨、第四句通韻者、如季秀才邊庭冬怨、二體太希、作者避之爲佳、全篇三字俱用通韻者、明人間有之、如楊基初夏云、寂寂青山一鳥啼、齊紫藤花落、午風微、微不知晝漏長多少、但覺桐陰半日移、支許相卿數漏云、秋夜迢迢靜擁衾、侵孤鴻天外怨聲頻、眞銀缸落盡渾無寐、尤苦更籌枕上聞、文。

元人吳渭月泉吟社詩稿、考官謝翱所選、田園雜興律詩、凡二千七百三十五首、作者二百八十人、第一名、僞名羅公福、本名達文鳳、閩人、其詩云、老我無心出市朝、東風林壑自

七言絶句通韻を用ふるには、古人多くは概ね第一句にす、若し其の第二句通韻の者は、盧弼の邊庭春怨の如し、第四句通韻の者は、季秀才の邊庭冬怨の如し、二體太だ希なり、作者之れを避くるを佳と爲す、全篇三字俱に通韻を用ふる者は、明人間、之れ有り、楊基の初夏に云ふ、寂寂青山一鳥啼、齊紫藤花落、午風微なり、微、知らず晝漏長き多少ぞ、但だ覺ゆ桐陰半日の移るを、支、許相卿の數漏に云ふ、秋夜迢々靜に衾を擁す、侵、孤鴻天外怨聲頻なり、眞、銀缸落ち盡して渾べて寐ぬる無し、尤も苦む更籌枕上に聞ゆるに、文、

元人吳渭の月泉吟社詩稿は、考官謝翱の選する所、田園雜興の律詩、凡そ二千七百三十五首、作者二百八十人、第一名は、僞名の羅公福、本名は達文鳳、閩人なり、其の詩に云ふ、老我無心市朝を出づ、東風林壑自ら迢迢、一犁の好雨秋初めて種ふ、幾道の寒泉藥旋澆ぐ、憤を放つて曉に

逍遙一犁好雨秧初種、幾道寒泉藥旋澆、放
 檜曉登雲外壘、聽鶯時立柳邊橋、池塘見說
 生新草、已許吟魂入夢招、起句我字欠穩帖、
 結句語氣太窘、改作池塘留夢生新草、祇有
 吟魂屢相招、稍可、此詩何足壓卷、恐冤天下
 作者難哉識詩。

韓翃贈王侍御赴上都云、殘花片片細柳風、
 落日疎鐘小槐雨、相思掩泣復何如、公子門
 前人漸稀、雨爲平聲、是古例、釋文、雨平聲、易
 林、乘雲帶雨、與飛鳥俱、後句如疎速押、卻不
 押風字、抑不亂韻法哉。

君不見三字、用諸歌行長篇爲法、亦一體、三
 字句、五字句、七字句、竝可、起句、結句、轉韻、或
 不轉韻、押韻或不押韻、單用連用、俱可、各任

詩律

雲外の壘に登り、鶯を聴いて時に柳邊の橋に立つ、池塘
 見説く新草を生ず、已に許す吟魂夢に入つて招くを、と
 起句の我の字、穩帖を欠く、結句の語氣太だ窘む、改めて
 「池塘夢を留めて新草を生ず、祇に吟魂の屢々相招く有り」
 に作らば稍可なり、此の詩、何ぞ壓卷とするに足らん
 や、恐くは、天下の作者を冤せん、難いかな詩を識るや。

韓翃の王侍御が上都に赴くに贈るに云ふ「殘花片片細柳
 の風、落日疎鐘小槐の雨、相思泣を掩ふ復た何如ん、公子
 門前人漸く稀なり、雨は平聲と爲す、是れ古例、釋文に、雨
 は平聲、易林に「雲に乗じ雨を帶び、飛鳥と俱にす」後句に
 如疎速押して、卻つて風の字を押さず、抑も韻法を亂ら
 ざらんや。

「君見すや」の三字、諸れを歌行長篇に用ふるを法と爲す、
 亦一體、三字句、五字句、七字句、竝に可なり、起句、結句、轉
 韻、或は轉韻せず、韻を押し或は韻を押さず、單用連用、俱
 に可なり、各其の便宜に任す、張説の鄴都の引は起句

其便宜、如張說鄴都引、起句七字押韻、高適燕歌行、句中五字、岑參函谷關歌、起句三字不押韻、送魏升卿歸東都、句中七字、杜甫兵車行、連用一三字、一七字、俱轉韻押、曹將軍畫馬引、七字句中、衛萬吳宮怨、起句七字押韻、其例如此、又有君不聞、其例全。

日本詩選載、宇士朗塞上逢故人云、胡地秋風白髮新、相逢不語淚沾巾、那知今日陽關外、還見當時勸酒人、合作可賞、白髮改作白草、始合詩律、僧元政草山晚眺云、愛山頻出門、投杖倚松根、秋水界平野、暮烟分遠郊、露昇林際白、星見樹杪昏、自覺坐來久、蒼苔已有痕、可謂常建王昌齡流亞也、源白石送春云、春去從何路、花飛處處同、徒窮千里目、長

七字韻を押す、高適の燕歌行は、句中五字、岑參の函谷關の歌は、起句三字、韻を押さず、魏升卿の東都に歸るを送るは、句中七字、杜甫の兵車行は、連用一三字、一七字、俱に轉韻押す、曹將軍畫馬の引は、七字句中、衛萬の吳宮怨は、起句七字、韻を押すが如し、其の例此くの如し、又君聞かずや」といふもあり、其の例全し。

日本詩選に載する、宇士朗の塞上故人に逢ふに云ふ、胡地秋風白髮新なり、相逢ふて語らず、淚巾を沾ほす、那ぞ知らん、今日陽關の外還た、當時酒を勸むる人を見んとは、合作、賞すべし、白髮改めて白草に作らば、始めて詩律に合せん、僧元政の草山晚眺に云ふ、山を愛して頻に門を出で、杖を投じて松根に倚る、秋水平野を界し、暮煙遠郊を分つ、露昇りて林際白く、星見れて樹杪昏し、自ら覺の坐來の久しきを、蒼苔已に痕有り」と、常建王昌齡の流亞と謂ふべきなり、源白石の春を送るに云ふ、春去る何の路従りず、花飛んで處處同、徒に千里の目を窮む、長く五更の風を恨む、歸意藤蘿綠に、離情芍藥紅なり、相思贈る所無し、寄せて不言の中に在り」と、前聯尤妙、後聯精工、結語不盡の意あり。

恨五更風歸意斷蕪綠離情芍藥紅相思無
所贈寄在不言中前聯尤妙後聯精工結語
有不盡之意。

服南郭送滕萬祐遊東奧云東奧多奇跡斯
遊良壯哉名山開石室滄海上仙臺禹穴探
書去秦舟求藥回行裝輕萬里羨爾勝情才
二聯事意叢聚若改上作古卽爲風景太可
輕萬里虛誕妄言當作應急促對前壯哉。

高蘭亭吳宮怨云芙蓉水殿映清波宮女如
花滿館娃惟有姑蘇臺上月五湖秋色不勝
多此作摸擬特甚然首尾合成非不通也山
北山云太白詩月照相映蘭亭詩四句無照
字何以應月且用三四句爲二三句是失體
也又如宮女如花滿春殿花春相呼蘭亭才

服南郭の滕萬祐が東奥に遊ぶを送るに云ふ東奥奇跡
多し斯の遊良に壯なるかな名山石室を開き滄海仙臺
に上る禹穴書を探つて去り秦舟薬を求めて回る行装
萬里を輕んず羨む爾が勝情の才と二聯事意叢聚若し
上を改めて古に作らば卽ち風景たる太だ可なり萬里
を輕んずるは虚誕妄言當に「急促に應ず」に作るべし
前の壯なるかなに對す。

高蘭亭の吳宮怨に云ふ芙蓉水殿清波に映ず宮女花の
如く館娃に滿つ惟だ姑蘇臺上の月のみ有つて五湖の
秋色多きに勝へず此の作摸擬特に甚し然れども首尾
合成通ぜざるに非るなり山北山云ふ太白の詩は月と
照と相映ず蘭亭の詩は四句に照の字無し何を以て月
に應ぜん且三四の句を用ひて二三の句と爲す是れ失體
なり又宮女花の如く春殿に滿つもの如き花春相呼ぶ
蘭亭才かに春殿を變じて館娃と爲し遂に照應を失す

變春殿爲館娃、遂失照應、予意不然、如花應上芙蓉、且古人用如花字、何必下春字、如越王宮裏如花人、越女顏如花、越王問統紗、可以見已、月字應下色、多劉賓客詩、水流無限月明多、古人用月字、何必拘拘用照字、三四句爲二三句、亦可、作者臨時隨宜、何必有某句第一某句第二三之常式乎、岑參春夢結句云、行盡江南數十里、杜牧采爲首句、杜工部漫興第二句云、點溪荷葉疊青錢、何橘潭采爲傷春首句、云荷葉初浮水上錢、山北山不知詩、妄評詩、可咲甚。

一人詩來乞筆削、其詩云、獨步橋頭支杖、留松低古澗、暮山秋、楓林昨夜霜新下、紅錦如霞洗碧流、前二句支杖看松、後二句賞楓、

と予意ふに然らず、花の如くは、上の芙蓉に應ず、且つ古人「花の如く」の字を用ふる、何ぞ必ずしも、春の字を下さん、越王宮裏花の如き人、越女顔花の如し、越王統紗に向ふ、以て見るべきのみ、月の字、下の色多に應ず、劉賓客の詩に「水流限り無く月明多し」と古人月の字を用ふる、何ぞ必ずしも、拘々として照の字を用ひん、三四の句を二三の句と爲すも亦可なり、作者時に臨み宜しきに隨ふ、何ぞ必ずしも、某句は第一、某句は第二の常式あらんや、岑參の春夢の結句に云ふ「行き盡す江南の數十里」、杜牧采りて首句と爲す、杜工部の漫興の第二句に云ふ「溪に點する荷葉青錢を疊む」、何橘潭采りて傷春の首句と爲して云ふ「荷葉初て浮ぶ水上の錢」と、山北山詩を知らずして、妄に詩を評す、咲ふべきこと甚し。

一人詩を齎らし來りて筆削を乞ふ、其詩に云ふ、獨步橋頭杖を支へて留る松低くして古澗暮山の秋、楓林昨夜霜新に下り、紅錦霞の如く碧流に洗ふて、前二句は、杖を支へて松を見る、後二句は、楓を賞す、宛も二首の詩を讀む

宛如讀二首詩、而松意不足、楓亦不盡、試改松作楓、楓林作林間、始爲合作、四句貫通、賞楓意十分、今人作絕句、第三轉句、全然轉去、不接前二句、每有此病、宜戒已、其人始得詩律、後來間言出佳詩來、遂爲一詩人。

が如し、而して松意足らず、楓も亦盡くさず、試に松を改めて楓に作り、楓林を林間に作らば、始めて合作と爲り、四句貫通して、楓を賞するの意十分ならん、今人絶句を作るに、第三轉句、全然轉じ去りて、前の二句に接せず、毎に此の病あり、宜しく戒むべきのみと、其の人、始めて詩律を得、後來間、佳詩を言ひ出し來り、遂に一詩人と爲れり。

詩

律

終

日本詩話叢書

五四